

鉄の音と、 家族の食卓

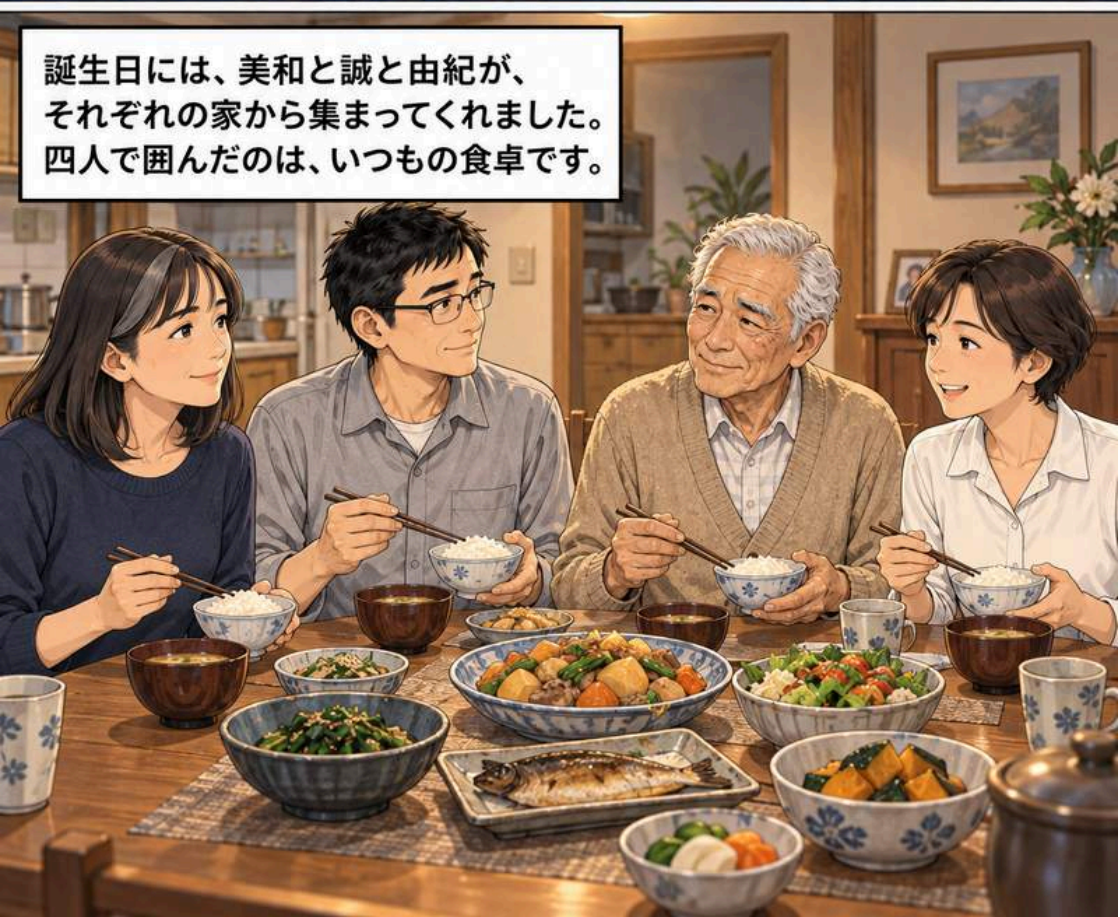


高橋正一



令和八年の一月、
わたしは八十八に
なりました。

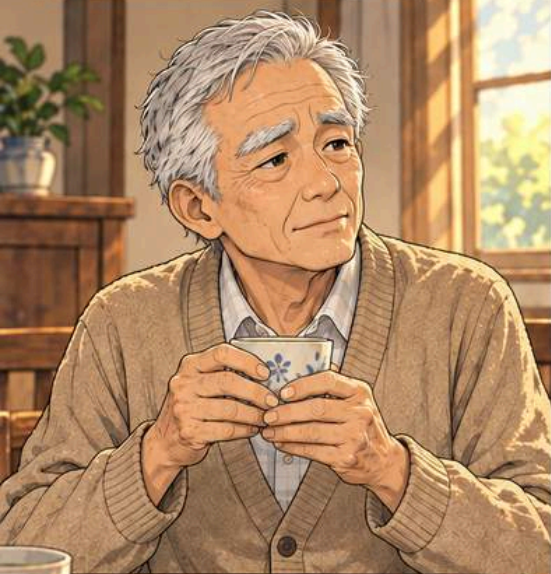
誕生日には、美和と誠と由紀が、
それぞれの家から集まってくれました。
四人で囲んだのは、いつもの食卓です。



この食卓は、文子と二人で、
家族の集まる場所にしてきたものです。



食事がすんで、
ひと息ついたときでした。



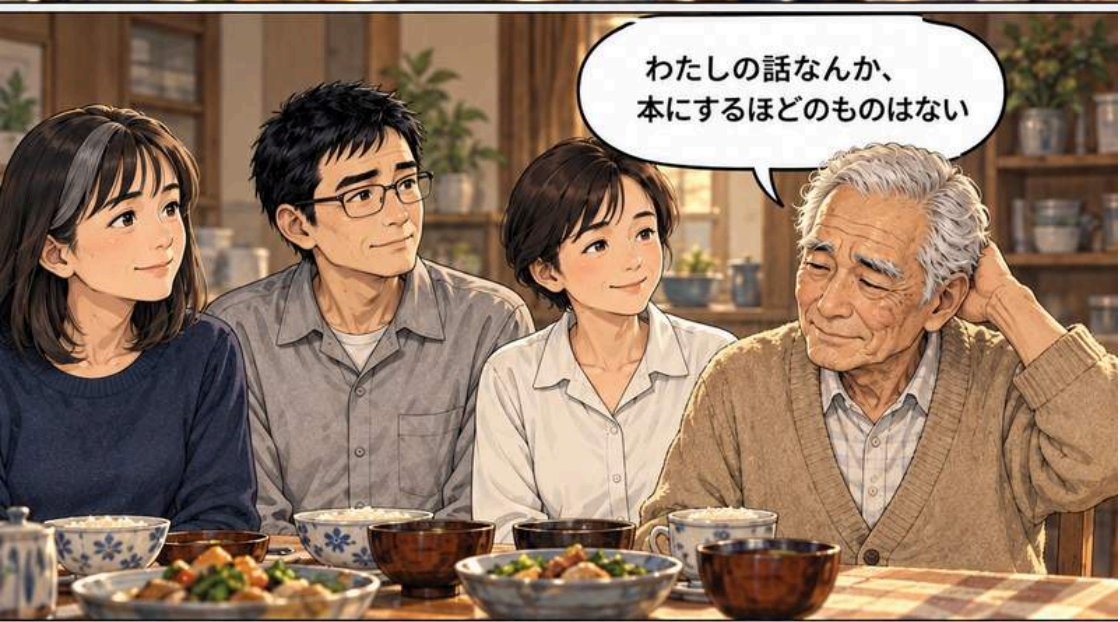
お父さんの話を、
本にしよう







文子がいたら、きっと誰より先に
「いいじゃないの」と言ったでしょう。



わたしの話なんか、
本にするほどのものはない



工場で旋盤を回して、
家族を食べさせてきただけの
人間です。



それを決めるのは、
読むほうよ



それ以上、言い返す言葉が
見つかりませんでした。



それで、引き受けることにしたのです。

さて、何から話せばよいのか。
考えていると、耳の奥で鳴りだした
音がありました。

カン、カン、という、
鉄を打つ音です。
子どものころ、毎朝聞いていた
父の音でした。





八十八年のうち、
朝倉町で暮らしたのは
十八年ほどです。



それなのに、いちばん先に
浮かんだのが朝倉町の音だったことが、
自分でもふしぎでした。



八十八年分の話をするなら、
やはりあの音から始めるのが
よいのだと思います。



ただ、先にお断りしておきます。子どものころのことは、あとで母や正二から聞いた話とまざっています。



どこまでが自分の記憶なのか、わたしにも自信がありません。そのつもりで読んでください。

わたしは昭和十三年の一月、
朝倉町の川治いの家に
生まれました。



父は野鍛冶でした。
農家の人を使う鍬や鎌を打ち、
刃のこぼれたものを直すのが
仕事です。



朝は、父がふいごで火を
おこす音と、鉄を打つ音で
目が覚めました。

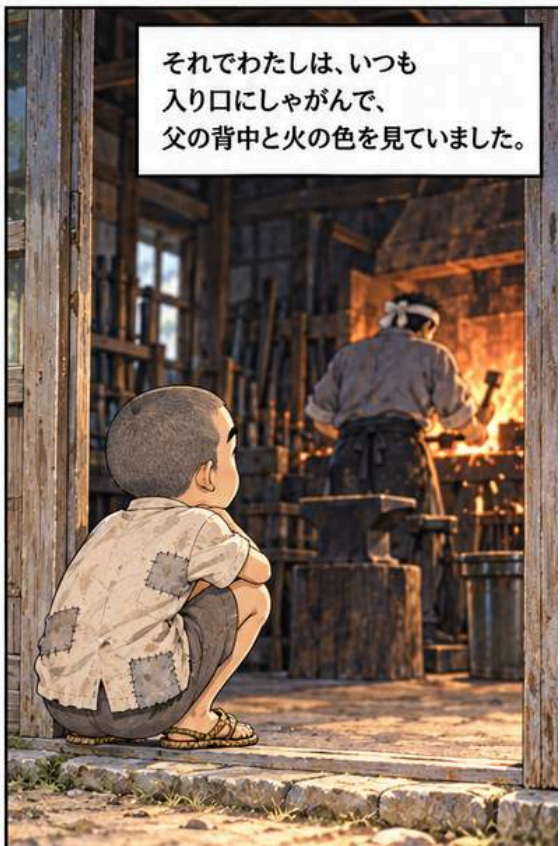




真っ赤に焼けた鉄を
桶に入れると、ジュッと音が出て、
白い湯気が上がります。



火のそばに来るな。
見るなら、そこで見とれ

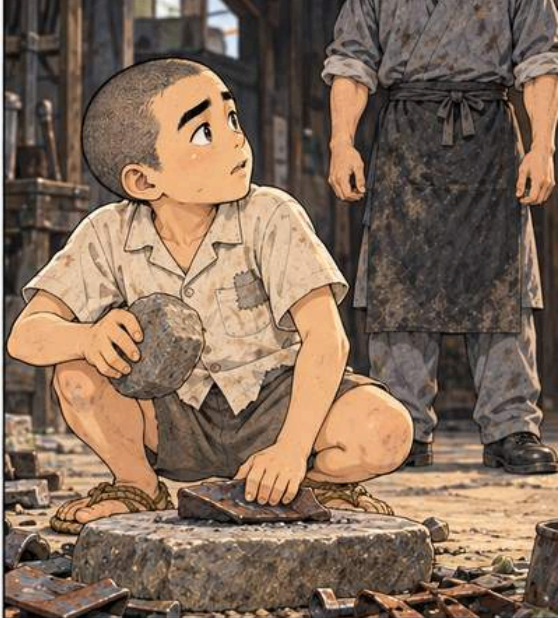


それでわたしは、いつも
入り口にしゃがんで、
父の背中と火の色を見ていました。

あるとき、鉄くずを拾って、
平たい石の上に置き、別の石で
叩いてみました。父のまねです。

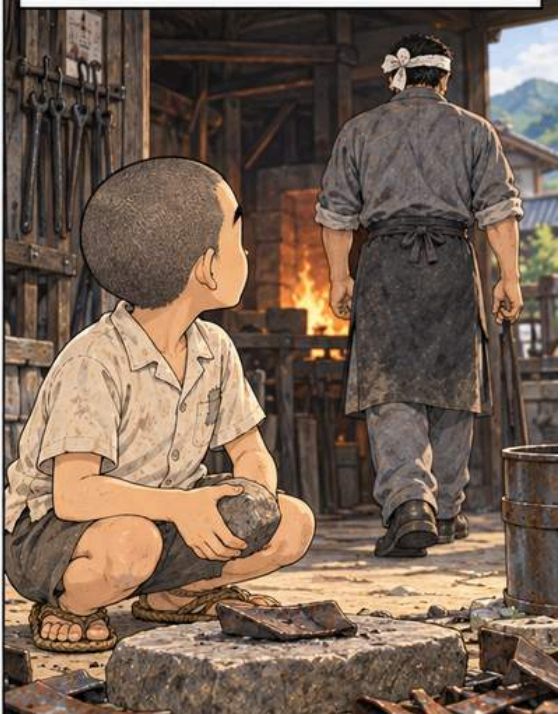


そこを父に見られました。



音が違う

どこが違うのか、そのときの
わたしには、まるでわかりませんでした。





父は持ち主の前で一度、その鎌を草に当てて見せました。すっと切れるのを確かめてから、渡すのです。



お父さんの音が止んだら、ご飯だよ



わたしにとって食卓というのは、鉄の音が止んだあとに始まるものでした。

昭和十七年、わたしが四つのときに、
弟の正二が生まれました。その朝は、
鍛冶場から音がしませんでした。



母のところへ行ってみると、
正二が寝ていました。

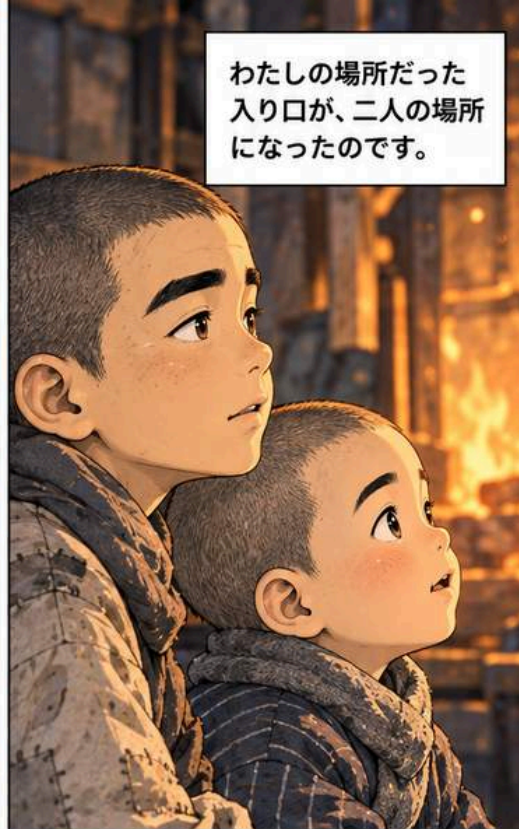


正二は泣いていても、川の音を聞かせると、
泣きやむことが多かったのです。





二人とも、
そこで見とれ

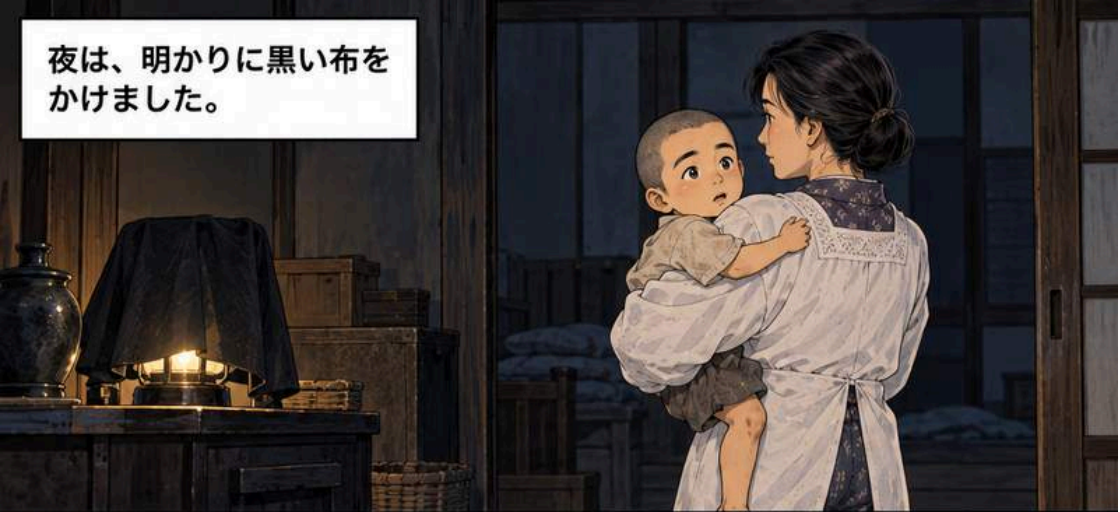


わたしの場所だった
入り口が、二人の場所
になったのです。



正二と二人で、熱い、熱いと
言いながら分けて食べました。

夜は、明かりに黒い布を
かけました。



戦争が終わった日は、暑い日でした。
大人たちは近所の家のラジオの前に
集まっていました。



しばらくして、母が黒い布を外しました。
その晩は、部屋が急に明るく見えたのを
覚えています。



それから何日かして、
朝、鍛冶場からまた鉄を打つ
音がしました。カン、カン、という、
あの音です。



わたしの耳に残っているのは、
戦争の音より、父の鉄の音のほうです。



戦争が終わった年の秋、
わたしは二年生でした。
筆に墨をふくませて、
言われた行を黒く消していくのです。



よう拾った

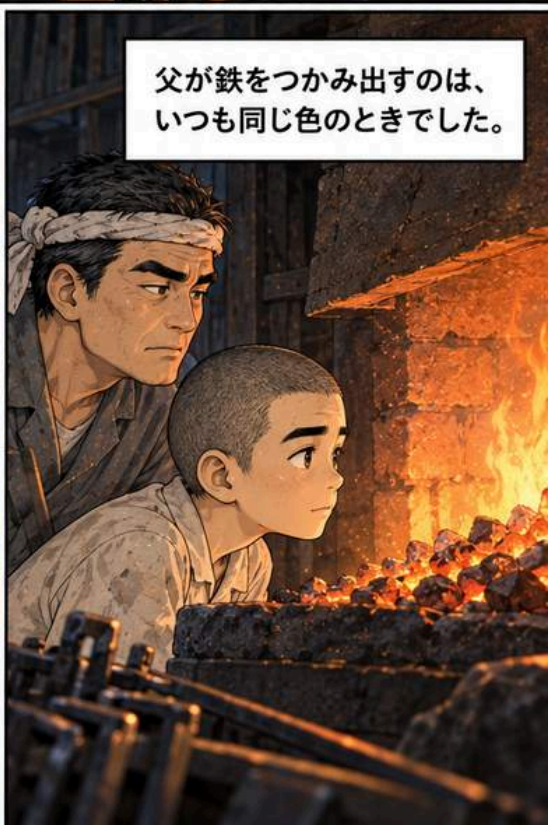


昭和二十三年の春には、
六つになった正二が、
同じ学校に上がりました。

昭和二十五年、十二の年から、
わたしは父の鍛冶場で、ふいごを
押す手伝いを本格的に始めました。



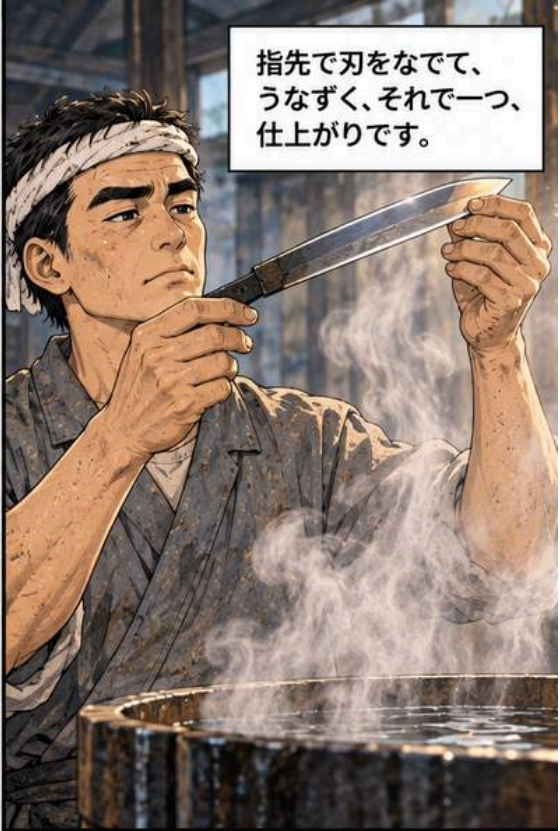
火は色で見ろ



父が鉄をつかみ出すのは、
いつも同じ色のときでした。



鉄は、
待ってはくれん



指先で刃をなでて、
うなづく、それで一つ、
仕上がりです。

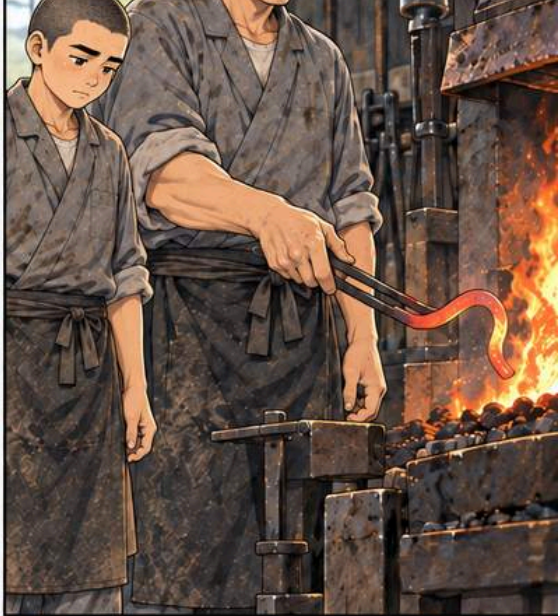


何も言われない日は、
うまくいった日なのだと、
わたしはずいぶんあとになって
気がつきました。

父が一度だけ、
残りの鉄で、火箸を
打たせてくれました。



もう一回



三本目で、ようやく
まっすぐになりました。



兄ちゃん、
ずるい





昭和二十八年の春、
わたしは十五で、町の高校に
入りました。家から高校までは、
歩いて片道一時間かかりました。



歩けば着ぐ



冬の帰り道、橋のたもとで
正二が待っていることが
ありました。

町の金物屋に、工場で作った
鍬や鎌が並ぶようになったのです。

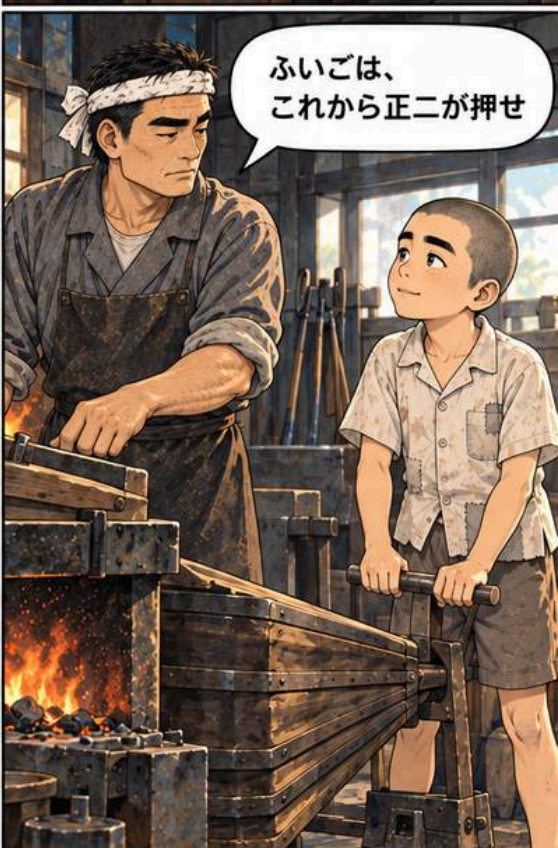
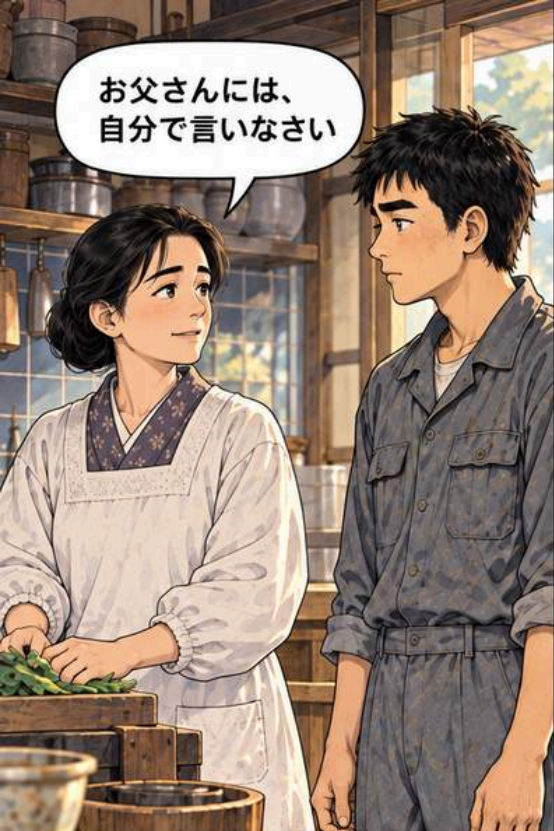


直す仕事があるうちは、
まだええ



やがて、炉に火を入れない日も
出てきました。









昭和三十一年度の春、
わたしは夜行列車で
青海市に出てきました。
十八でした。



小さな工場で、
最初の一年は、
削っては捨てる毎日です。



先輩は多くを語らない人で、
わたしの削った部品を指で
なぞっては「まだ、音が違う」
とだけ言いました。



夜、誰もいなくなった
工場で旋盤を回し、
耳を澄ませたものです。



いまでも目を閉じると、
あの晩の工場の音が
聞こえてくるような気がします。
けれど、そこへたどりつくまでの
ことから、順に話しておこうと
思います。



荷物は柳行李がひとつと、
母が持たせてくれたにぎりめしの
包みだけでした。



外はすぐに真っ暗になり、
見えるのは窓に映る自分の顔ばかりです。



明け方に食べた残りのにぎりめしは、
冷たく固くなっていましたが、
家の塩の味がしました。



ここでは山のかわりに
煙突が立っている、
と思ったのを覚えています。



門をくぐると、油と鉄くずの
においがしました。
父の鍛冶場とは違うにおいです。

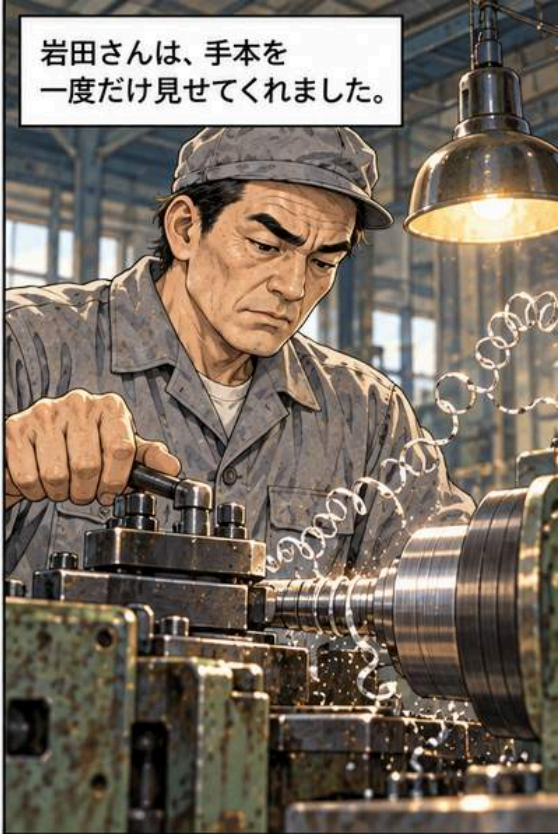


みな、その音の中で、
どこに立っていればいいのか
わからない顔をしていました。

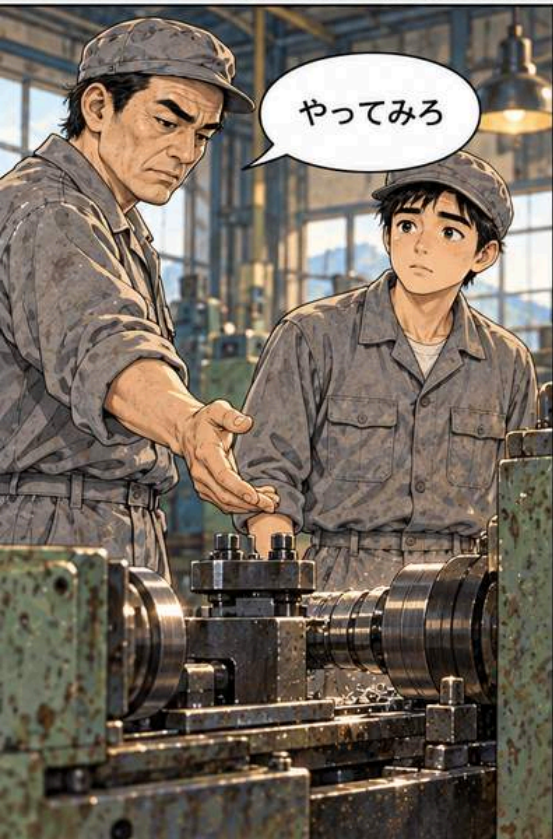
はじめのひと月ほどは、
旋盤にさわらせてもらえ
ませんでした。



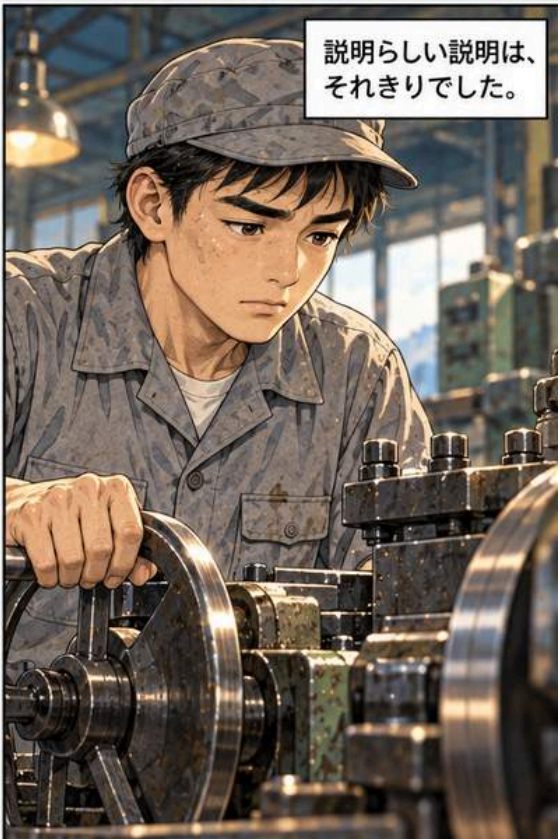
岩田さんは、手本を
一度だけ見せてくれました。



やってみろ



説明らしい説明は、
それきりでした。



岩田さんは何も言わずに、
ウエスをわたしに渡しました。



袖口のボタンは
留めとけ



鉄は、捨てられても
文句を言いません。だからよけいに、
申しわけない気がしました。



母からは、ときどき葉書が
届きました。それを読むと、
もう少しやってみよう
思うのです。



岩田さんは、わたしの削った
部品を手にとると、目で見
るより先に、指でなぞりました。



まだ、音が違う



はじめは、何のことかわかりませんでした。
音など、どこにもありません。



片づけて帰れよ



製品にならない鉄の切れ端を、
岩田さんが箱にまとめて、
わたしの旋盤の横に置いておいてくれました。

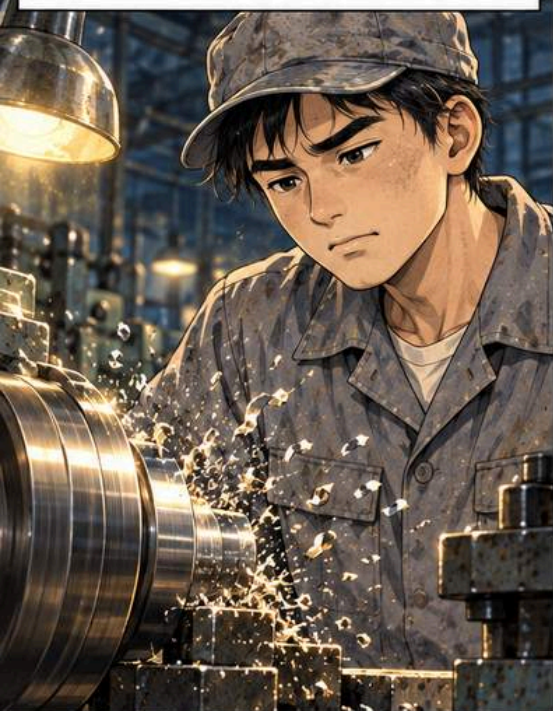


誰もいなくなった工場は、
昼とはまるで別の場所でした。
自分の旋盤の音しかしません。

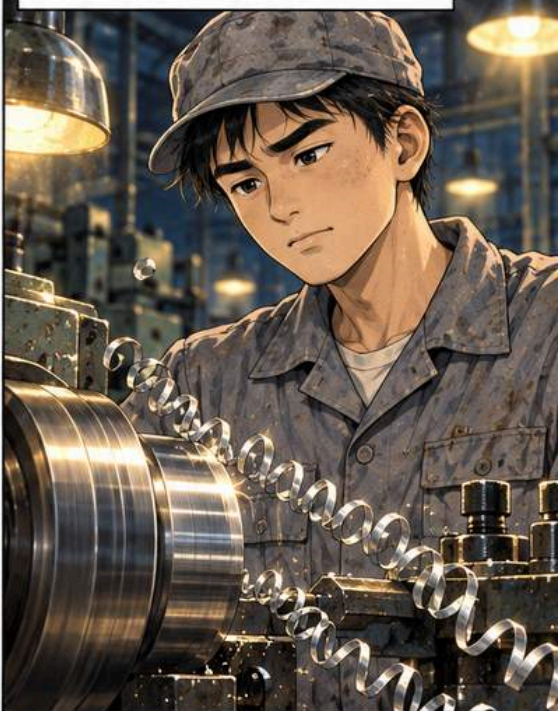
刃物が鉄に食いつく音、
削りくずが流れる音、
モーターのうなり。



刃物の当たり方がよくないときは、
音が高く、きしむような音になります。



うまくいっているときは、
低く、ひと続きの音が鳴ります。



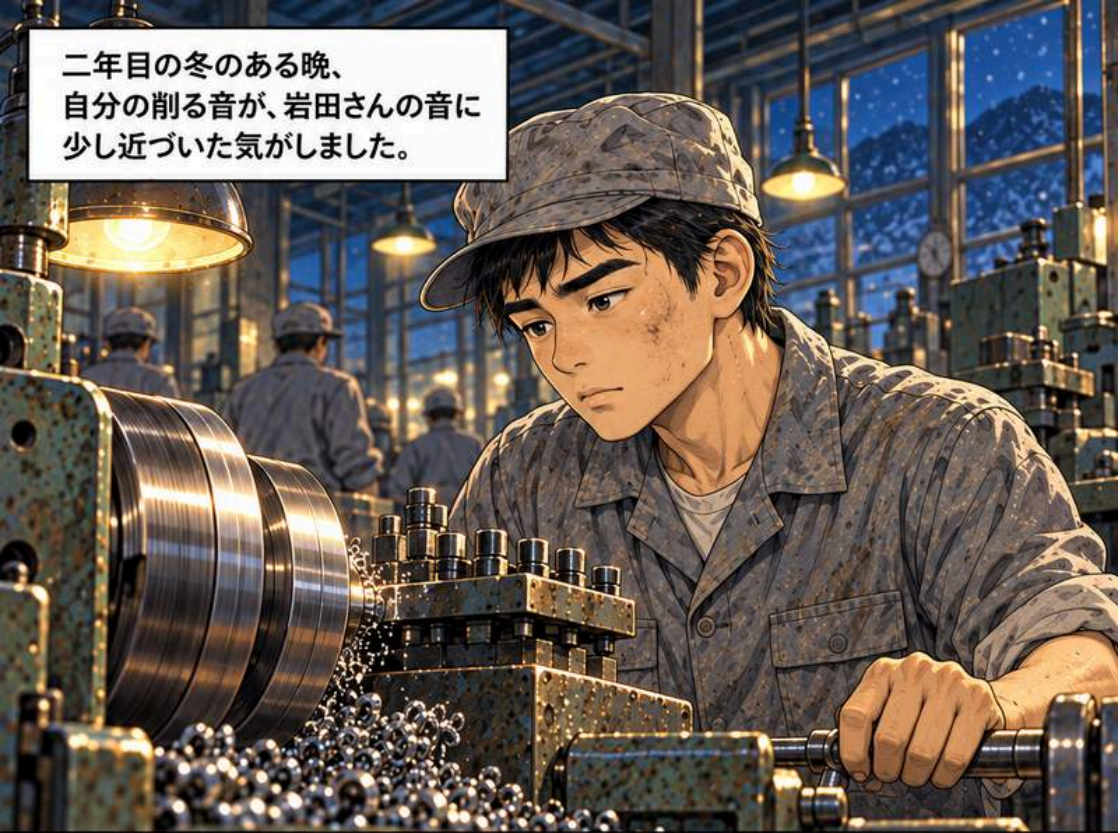
その音で削ったものは、
手ざわりが違います。



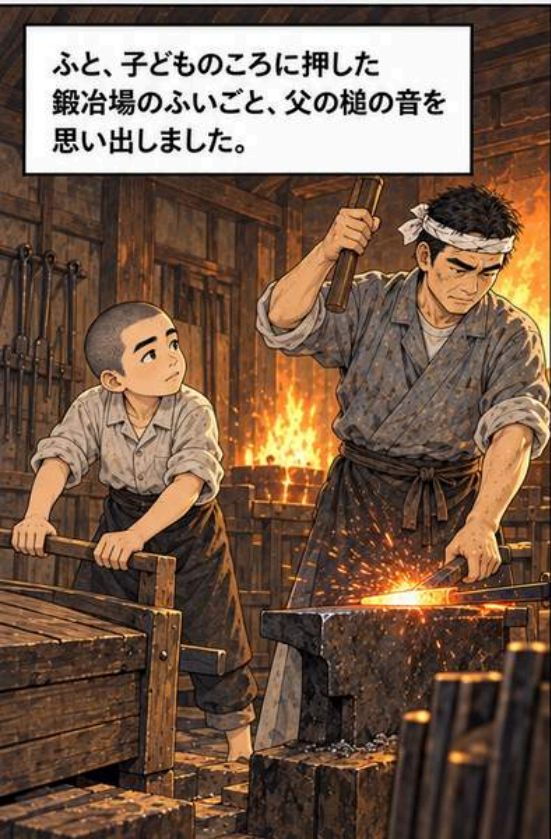
音と手ごたえは、同じことを
別々に教えてくれていたのです。



二年目の冬のある晩、
自分の削る音が、岩田さんの音に
少し近づいた気がしました。



ふと、子どものころに押した
鍛冶場のふいごと、父の槌の音を
思い出しました。



遠い町の工場で、父と同じように
鉄の音を聞いている。
妙なものだと思います。

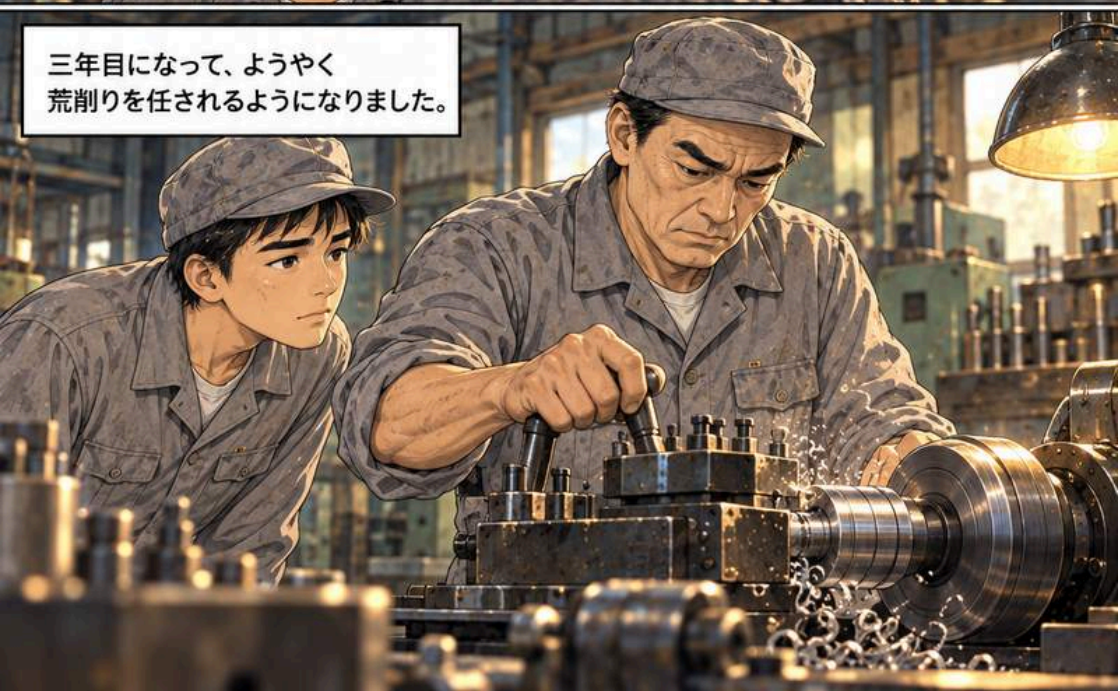




次の日、削った部品を
岩田さんに見せました。
岩田さんは指でなぞって、
そのときは何も言いませんでした。



「音が違う」と言われなかったのは、
それがはじめてでした。



三年目になって、ようやく
荒削りを任されるようになりました。

朝倉町の家では、
夜になると川の音がしていました。
寮では、それが聞こえません。



その手帳には、その日に削った
部品の寸法と、うまくいかなかった
わけを書きつけていました。



また残りか





おまえがやれ

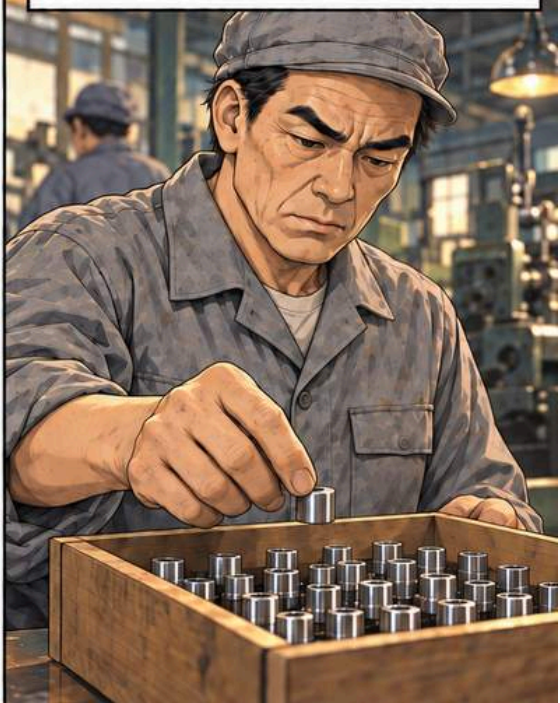
測って、少し削って、また測る。
削りすぎたら、もう戻せません。



最初の一個を削った日は、
昼の弁当がのどを通りませんでした。



何も言われなかったのが、
わたしにはいちばんの合格でした。





その月、母に葉書を書きました。
「一人で仕事を任されました」
とだけ書きました。



箱に詰められた部品は、
トラックで遠くへ運ばれていきます。
わたしはそれを見送りました。



部品を箱に入れる前に、
最後にもう一度、指でなぞる癖ができました。

昭和四十三年、
三十のときに班長になりました。



そのころから、
耳に鉛筆をはさむよう
になりました。



岩田さんに言われたことを、
今度はわたしが言う番になったのです。



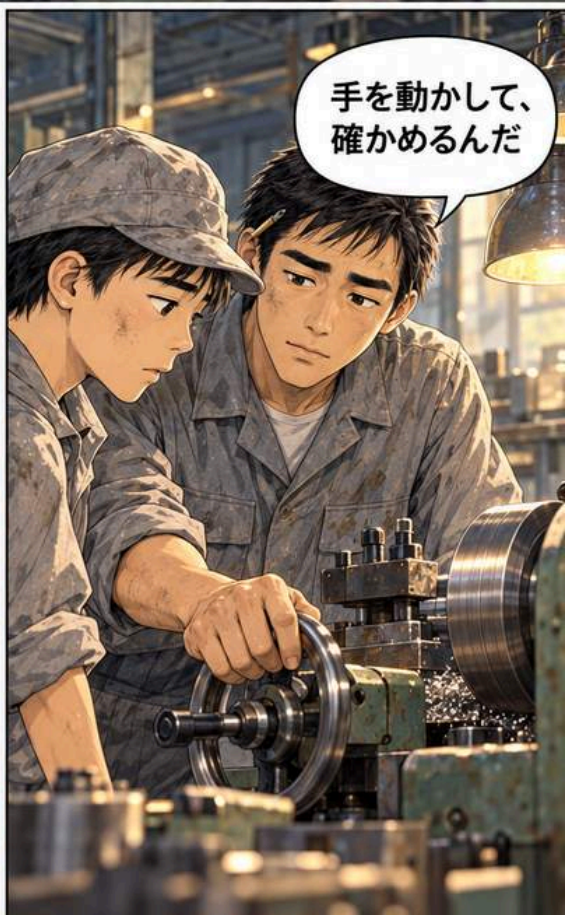
数字は合っているのに、
自信がない。その気持ちは、
わたしにもよくわかりました。



くず鉄の箱の前に立っていた
十八のわたしが、そこにいるような
気がしたのです。



手を動かして、
確かめるんだ





削り終えたものを、
ふたりで指でなぞりました。



その数字を信じていいかどうかは、
自分の手と耳で確かめるしかないのです。



片づけて帰れよ

言うてから、どこかで聞いた言葉だと
気がついて、ひとりで少し笑いました。

班長になって二年目の、
昭和44年のことです。
わたしは31になっていました。



油のにおいのする作業着のまま
事務所の戸を開けるのは、
どうしても落ち着きませんでした。



窓口で伝票を受け取っていたのが、
中村文子でした。







文字の書く数字は、
まっすぐで、読みやすい字でした。
図面の数字みたいだ、と思いました。



気がつくと、わたしは伝票を
持っていく日を楽しみに
していました。



駅まで並んで歩きました。
それが始まりです。



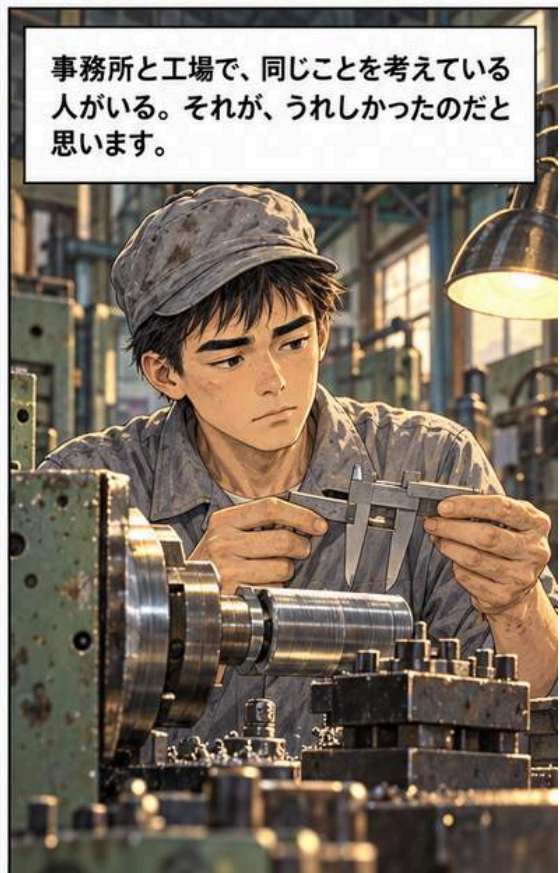
旋盤というのは何をする機械なのか。



見えないところで動いているのね



数字は、まちがえたまま先へ行くと、あとで直すのが大変ですから



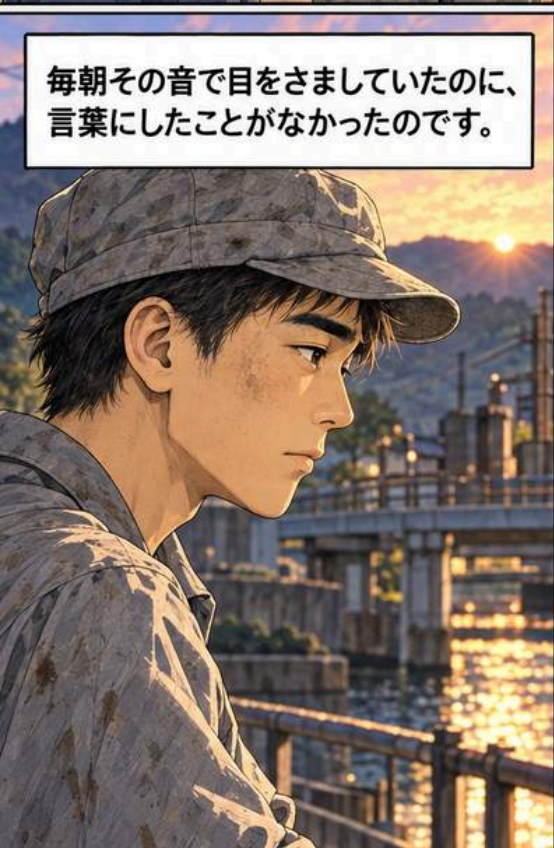
事務所と工場で、同じことを考えている人がいる。それが、うれしかったのだと思います。



鉄を打つ音って、
どんな音ですか



カン、でもない。キン、でもない。
口で言おうとすると、どれもちがう
気がしました。



毎朝その音で目をさましていたのに、
言葉にしたことがなかったのです。



いつか聞いてみたいです



結婚を申し込んだのは、
その年の暮れ近くでした。
何と言ったのかは、
覚えていません。



あのころのあなたは、
工場の話しかしない
人だった



母の手紙のおしまいに、
父の言葉が一行だけ。
「からだを大事に、ふたりでやれ」

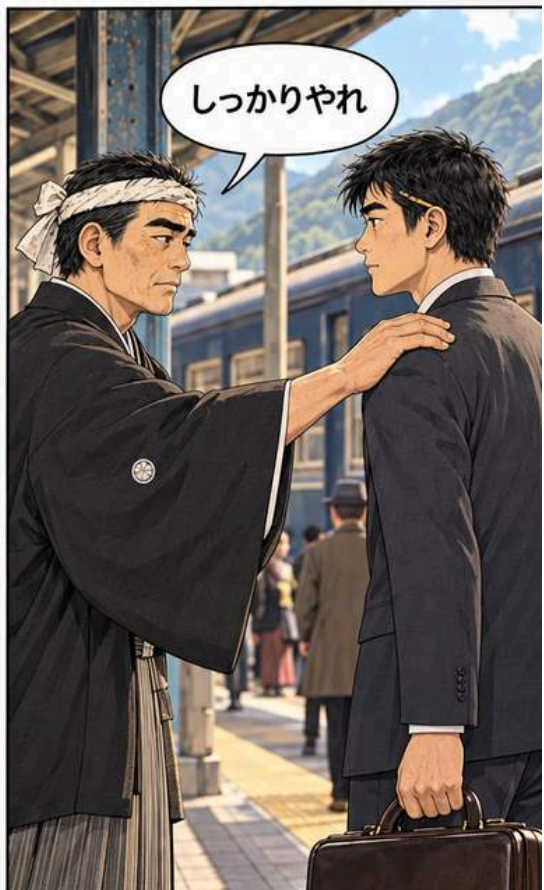
昭和45年、
わたしたちは結婚しました。
わたしは32、文子は28です。
父と母も、朝倉町から
出てきてくれました。



父は式のあいだ、ほとんど
何も話しませんでした。
ただ、文子にはていねいに
頭を下げていました。



しっかりやれ



文子は落ち着いた顔をしています、
わたしは顔がこわばっています。
旋盤の前に立つほうが、よほど楽でした。



結婚して最初の朝、文子は弁当を
作ってくれました。



きょうは何が
おいしかったですか



全部



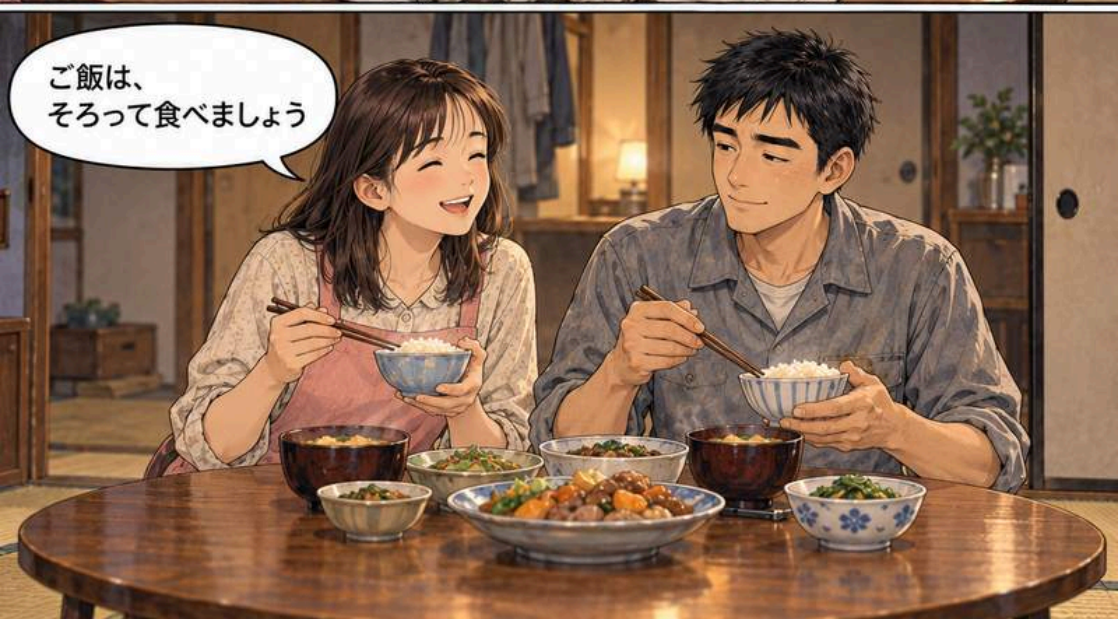
所帯を持って、青海市の社宅に移りました。二間と、小さな台所のある部屋です。



夕飯のあと、ちゃぶ台に新聞紙を広げて、それを直しました。文子は、それを横で見ているのが好きでした。



ご飯は、そろって食べましょう



どうしても遅くなる日は、
文子は先に食べずに待っていました。
冷めたみそ汁をあたため直してもらって、
ふたりで向かい合って食べる。



昭和47年に、
長女の美和が生まれました。



わたしは34でした。



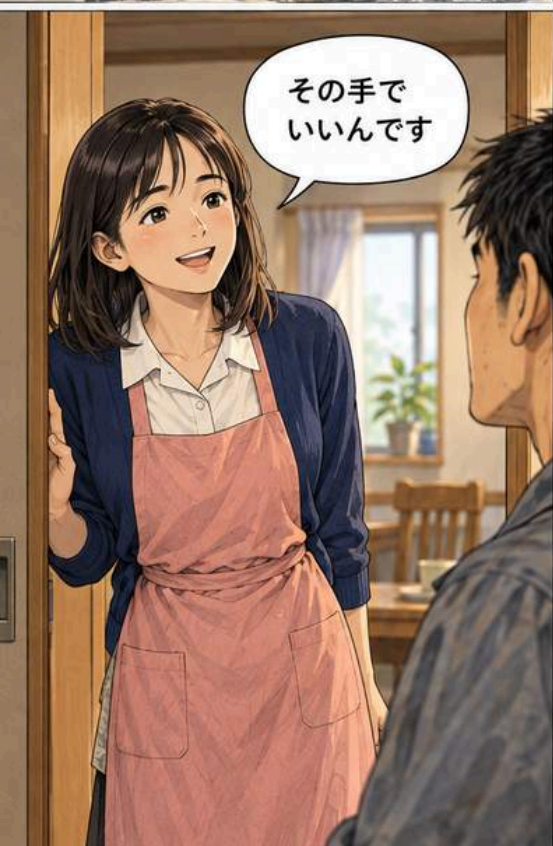
旋盤の仕事を十五年
あまり続けた手です。
わたしは何度も石けんで
手を洗いました。



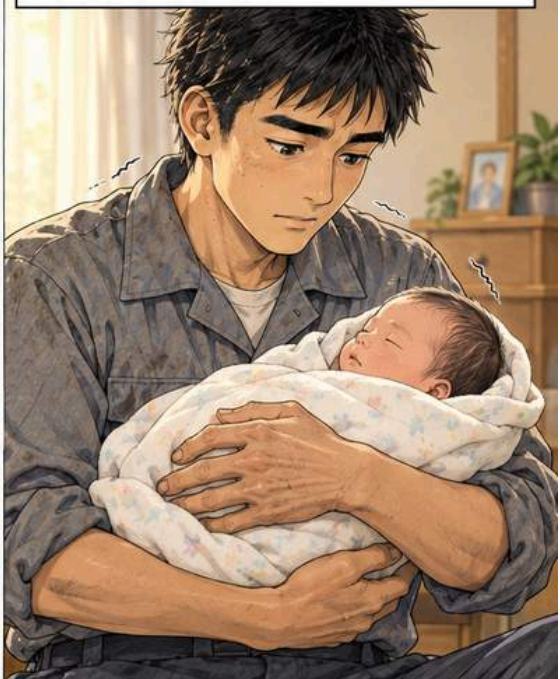
洗っても、割れ目の黒いところは
落ちません。



その手で
いいんです



軽いのに、腕がふるえました。
美和の重さには、見当のつけようが
ありませんでした。





夜中に美和が泣くと、
文子が出て、抱いて、
部屋のなかを歩きました。
わたしは布団のなかで聞いていました。



わたしは、日曜日に美和を
おぶって歩くくらいでした。



あのころ、もっとやれたはずだと、
いまでも思います。

昭和49年に、長男の誠が生まれました。
旋盤を止めて、手を洗って、
それからまた旋盤に戻りました。



ちゃぶ台に四人が座ります。
誠はまだ座れませんから、
文子のひざの上です。



お父さんに似た



美和は小石を拾っては川へ投げ、
誠はわたしの手につかまって、
水のほうへ行きたがりました。



美和は、口の達者な子でした。
わたしは、箸を止めて聞いていました。



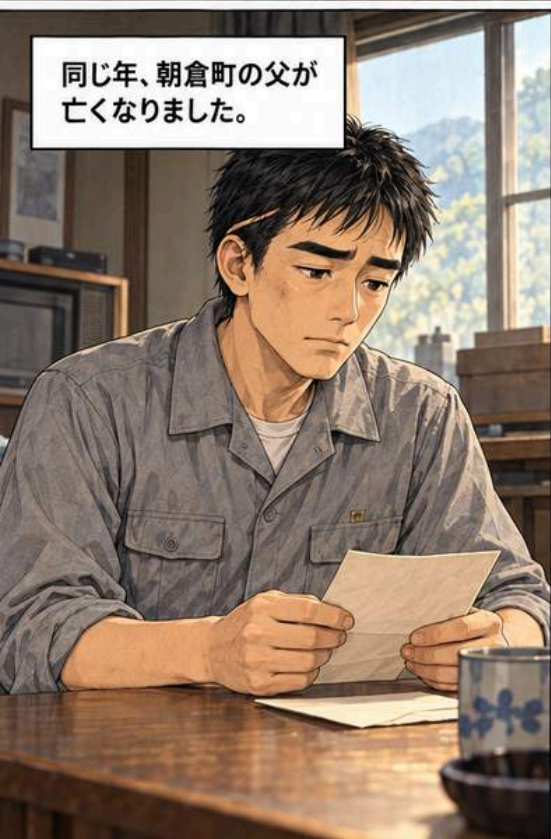
子どもが話しはじめたら、
最後まで聞く。途中で口をはさまない。



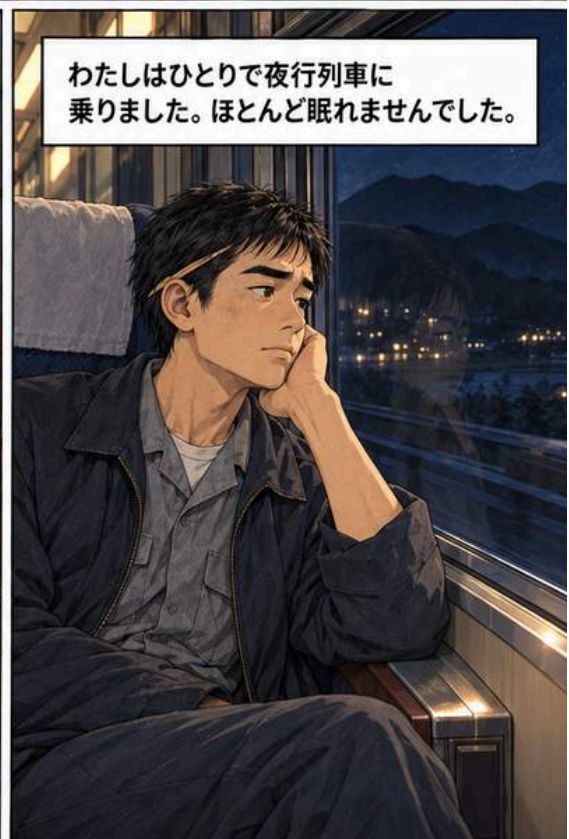
昭和51年に、
次女の由紀が生まれました。
五人がそろった最初の写真です。



同じ年、朝倉町の父が
亡くなりました。



わたしはひとりで夜行列車に
乗りました。ほとんど眠れませんでした。





朝倉町の家に着くと、
鍛冶場の火が落ちていました。



柄のにぎるところが、
父の手の形にすり減っていました。



音を出してしまうと、
何かが終わってしまうような
気がしたのです。槌は、
元の場所に戻しました。



父に、わたしの旋盤の仕事を、
きちんと見せたことが一度もなかった。
それでよかったのかどうか、
いまでもわかりません。



どうでしたか



わたしは、鍛冶場の音がしなかった、
とだけ答えました。その晩も、
五人でちゃぶ台を囲みました。

昭和54年、青海市の郊外に
家建てました。
わたしは41でした。



引っ越しの日、子どもたちは、
何もない部屋を走りまわっていました。



五人が座っても、ひじがぶつかりません。
それだけのことが、ずいぶんうれしかったのを
覚えています。



日曜日の朝、台所で
包丁を研ぐようになりました。
シャツ、シャツ。



目で見ると、指のほうが
確かなのです。

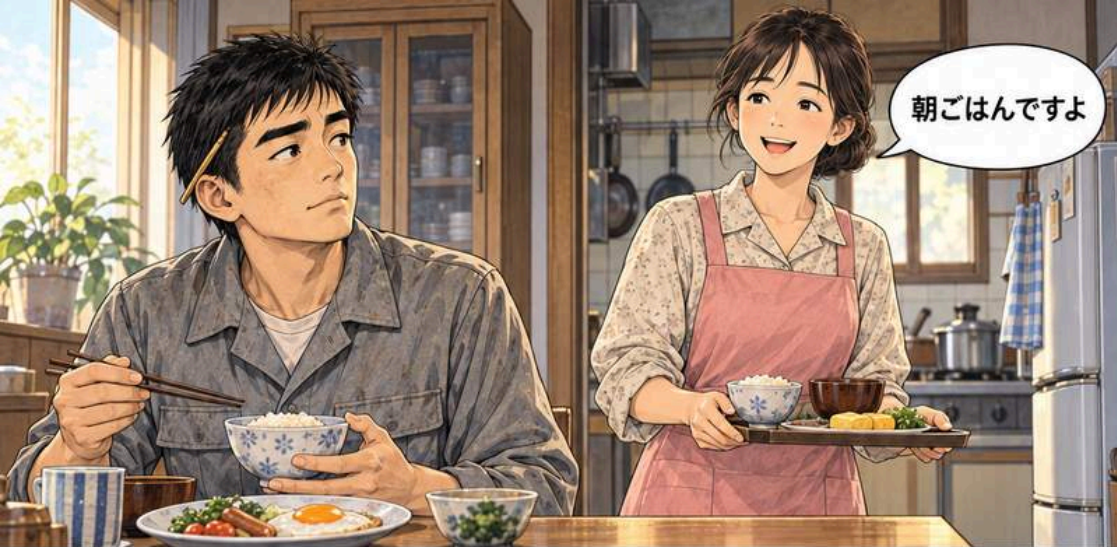


よく研げていけば、力を入れなくても、
すっと切れていきます。



もう一回







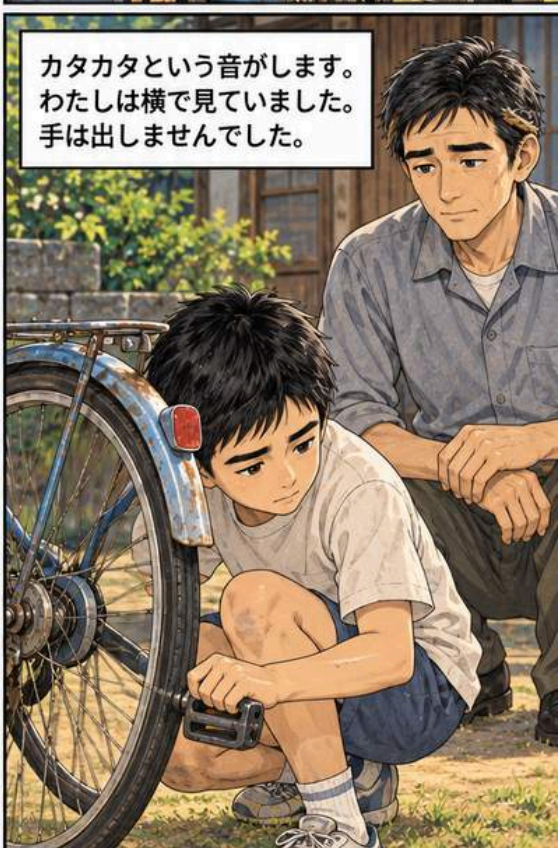
壊れた



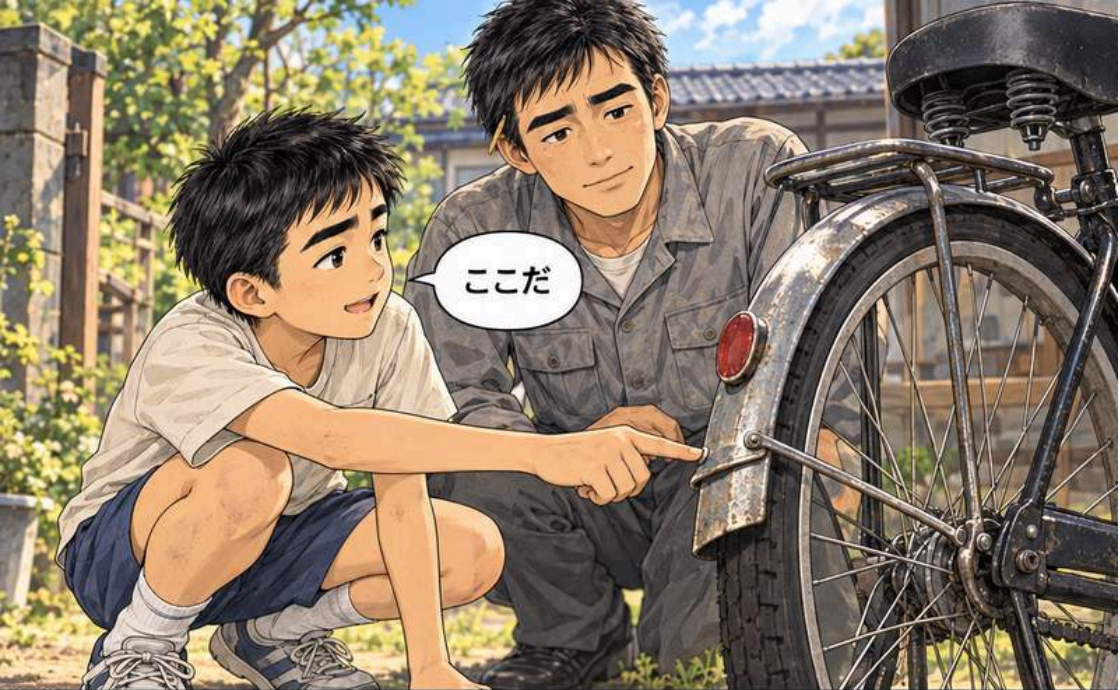
どこが悪いのか、だいたいの
見当はつきました。けれど、
それは言いませんでした。



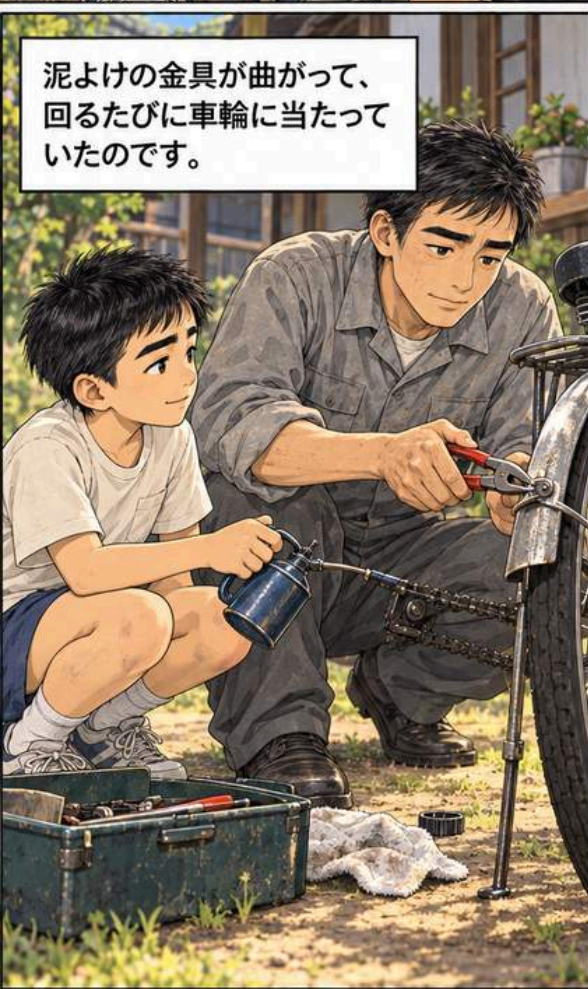
回してみろ。音を聞け



カタカタという音がします。
わたしは横で見ていました。
手は出しませんでした。



泥よけの金具が曲がって、
回るたびに車輪に当たって
いたのです。



自分で見つけた、という顔でした。
人に言われて直したことはすぐに
忘れますが、自分で見つけたことは
忘れません。





昭和58年の春、工場に初めて
数値制御の旋盤が一台入りました。
NC旋盤と呼んでいました。
わたしは45になっていました。

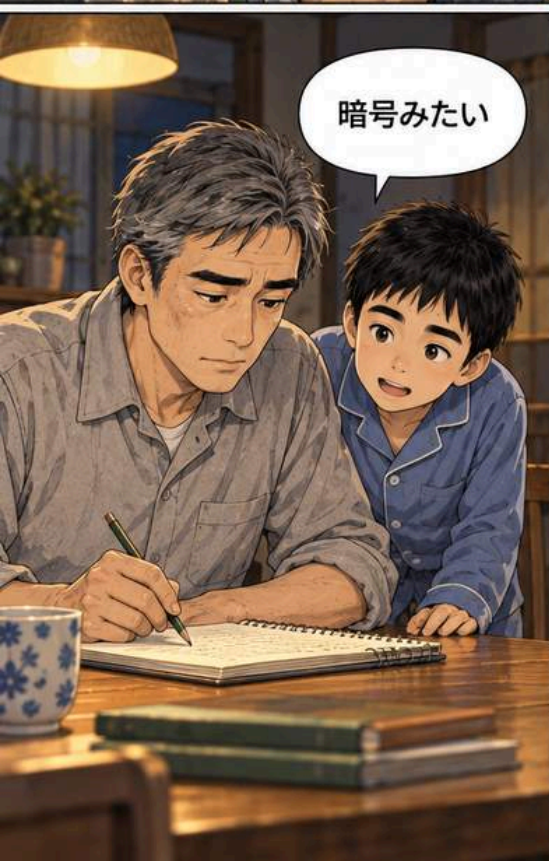


わたしで
いいんですか



旋盤をいちばん長く
触っているのは高橋だ

削る太さも、長さも、
ぜんぶ数字に置さかえて、
紙のテープに穴を開けて
読ませるのです。

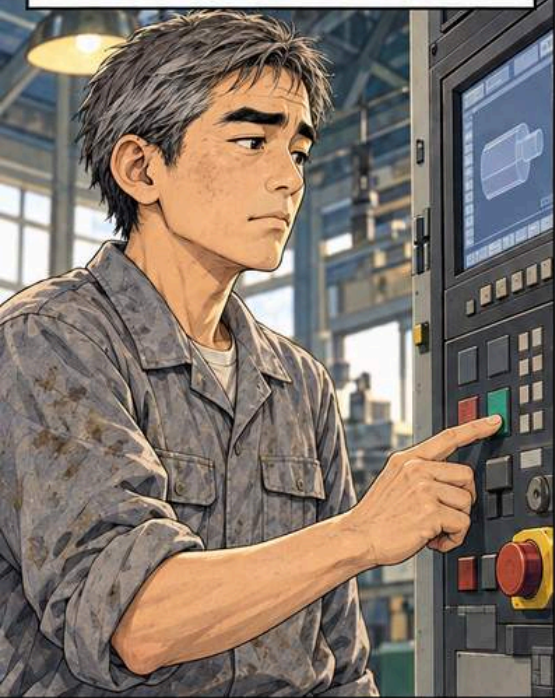


暗号みたい



そうだ。
機械にしか読めん
暗号だ

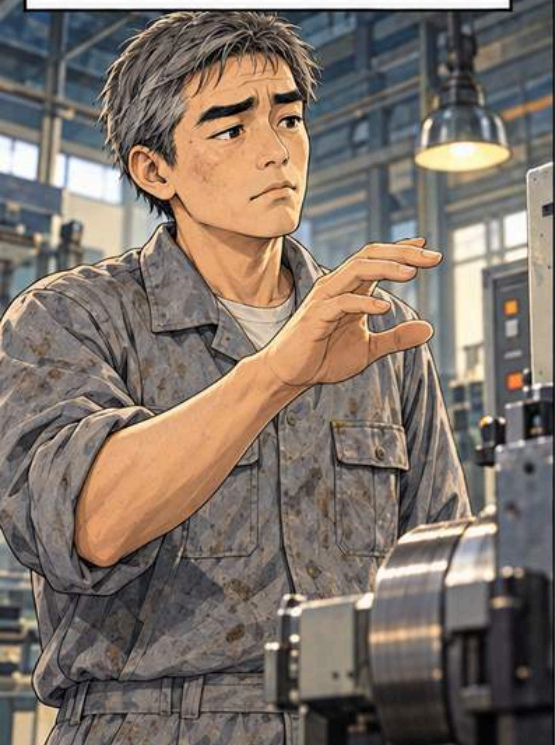
ボタンを押しました。
わたしはハンドルに触っていません。



それなのに、刃物がすうっと材料に
寄っていきました。



手の置き場がない、と思いました。



数字は合っていました。
合っているのに、しばらく、
その軸を手のひらで転がしていました。



A young man with grey hair, wearing a blue work shirt, stands in a workshop. He is looking at a lathe machine that is cutting a piece of metal, with sparks flying. The background shows other industrial equipment and a large window.

音は鳴っているのに、
それに返事をする者がいない。
そういう感じがしました。

A young man with grey hair, wearing a blue work shirt, is shown from the side, looking intently at a lathe machine. He is reaching out with his right hand towards a red emergency stop button on the machine. Sparks are flying from the cutting process.

機械は、数字に書かれたとおりに
動いて、自分からは止まりません。

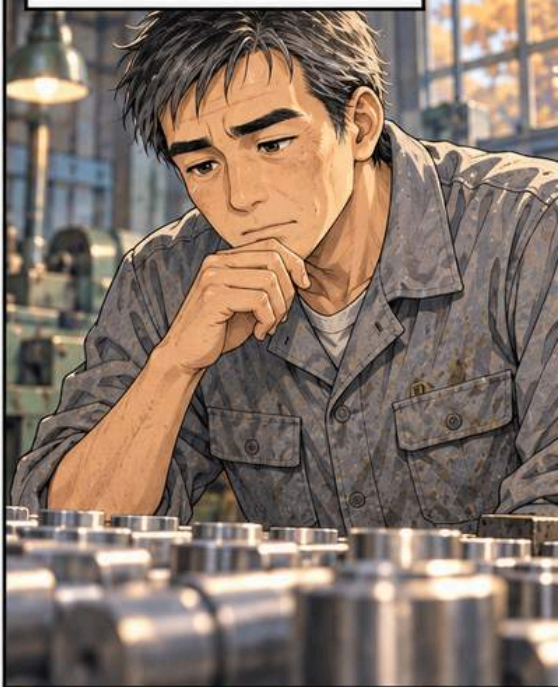
An older man with grey hair, wearing a blue work shirt, is shown from the side, looking at a lathe machine. He is gesturing with his hands as if explaining something. The machine is a large, green industrial lathe with various components visible.

あれは機械が削るんで、
人が削るんじゃない

同じ軸を何十本削っても、
太さがそろうのです。



これは手より正直だ、
と思いました。



お父さん、新しい
機械はどう



まだ、機械のほうが
上手だ



その思いが、
翌年の間違いのもとになりました。

昭和59年、細い軸の仕事が
来ました。太さの許し幅は、
百分の一ミリでした。



NC旋盤一台で、一度に仕上げる
工程に組みかえました。工程を
組んだのは、わたしです。



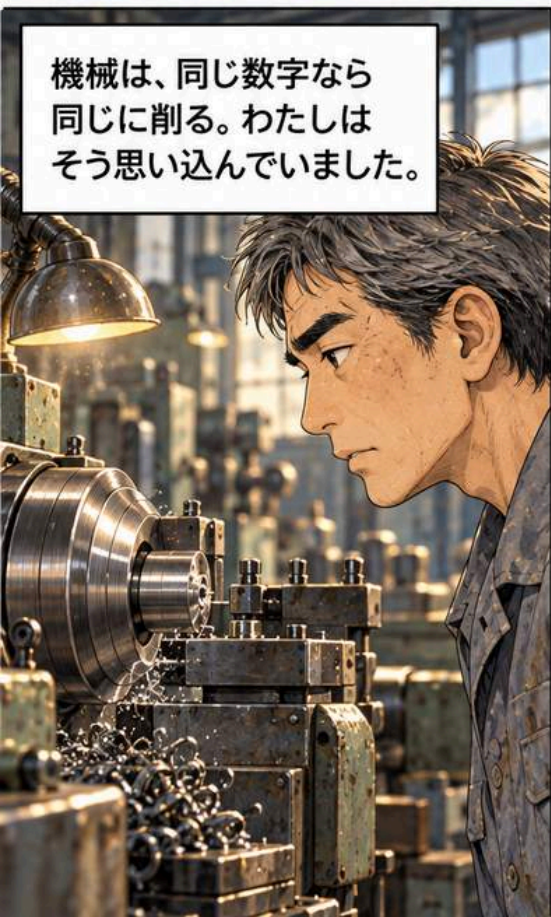
そして、もう一つ、
わたしが決めたことがあります。



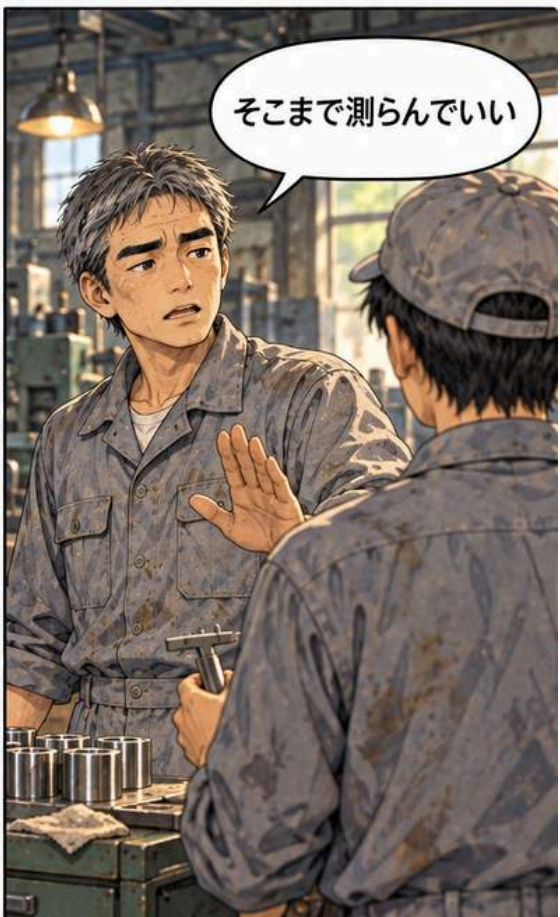
朝いちばんの数本を
よく測って、合っていれば、
あとは昼と夕方に一本ずつ測る、
というやり方に変えました。



機械は、同じ数字なら
同じに削る。わたしは
そう思い込んでいました。



そこまで測らんでいい



A young man with dark, slightly messy hair and a serious expression stands in a workshop. He is wearing a dark, long-sleeved work shirt. In front of him is a large, open wooden crate. The background shows a bright outdoor scene with a white truck and green hills under a blue sky with some clouds.

その年の初夏、
納めた軸の一部が、軸受けには
まらないと言って返されてきました。

A close-up shot of hands unpacking several cylindrical metal shafts from a wooden crate. The shafts are wrapped in crumpled brown paper. The hands are wearing a dark work shirt.

自分が包んで送り出したものが
帰ってきた、と思いました。

A young man is seated at a workbench, focused on measuring a small metal part with a micrometer. He is wearing the same dark work shirt. The workbench is cluttered with various metal parts and tools. A large industrial lamp is visible on the left, casting a warm glow. In the background, there are more workshop machines and a window looking out onto a bright day.

午後に削った軸が、わずかに
太かったのです。朝の軸は、
合っていました。

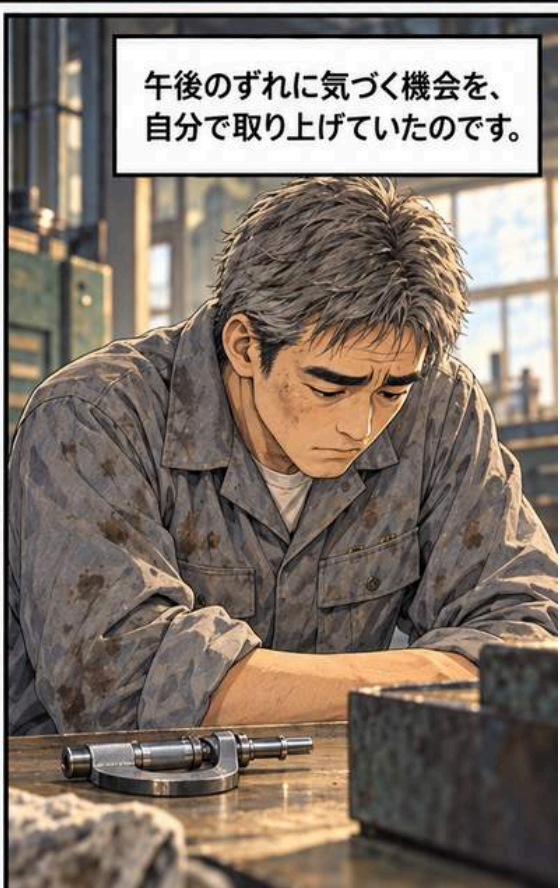
疑ったところが一つずつ外れていくと、
最後に残ったのは、わたしの決めたことでした。



金属は温まると、ほんのわずか
伸びます。午後には、削れる太さが
変わってしまうのです。



午後のずれに気づく機会を、
自分で取り上げていたのです。



わたしは、朝の冷えた機械で
数字を決めました。
そのうえで、測る数を
減らしました。

機械のせいではありません。
測るのをやめたのは、
わたしです。



原因がわかった日、わたしは課長に、
担当を降りたほうがいいのではないかと
言いました。



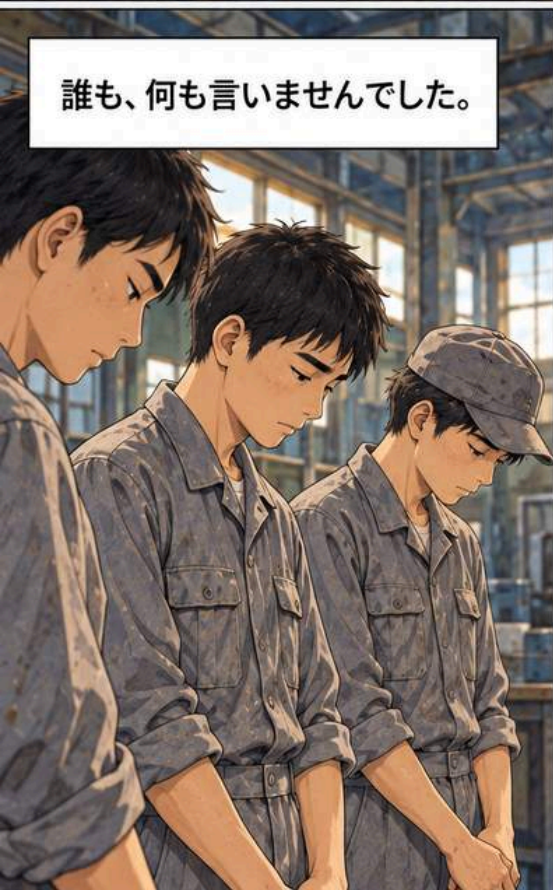
調べたのは高橋だ。
直すのも高橋がやれ



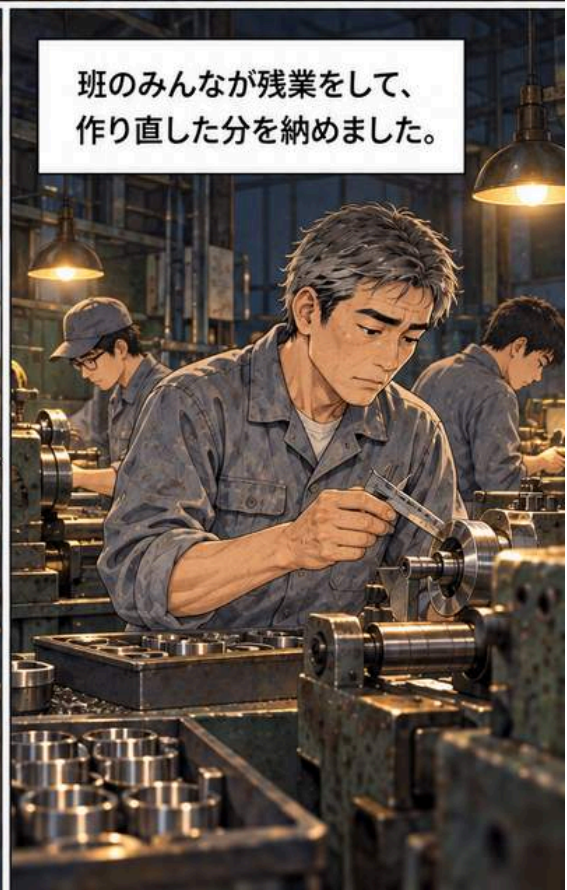
課長と二人で、取引先へ謝りに行きました。
そこのことは、ここには書かないでおきます。



測らんでいいと言ったのは、
わたしだ。わたしの間違いだ



誰も、何も言いませんでした。



班のみんなが残業をして、
作り直した分を納めました。

家では、仕事の話はしませんでした。
子どもたちの話を聞いているあいだだけは、
軸のことを忘れていられました。



文子にだけは、子どもたちが寝たあと、
台所で話しました。



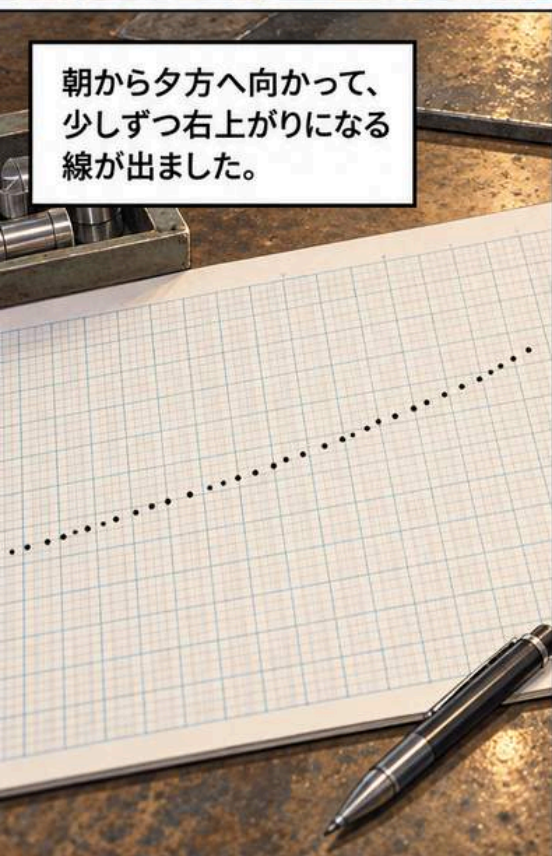
ご飯だけは
食べてください



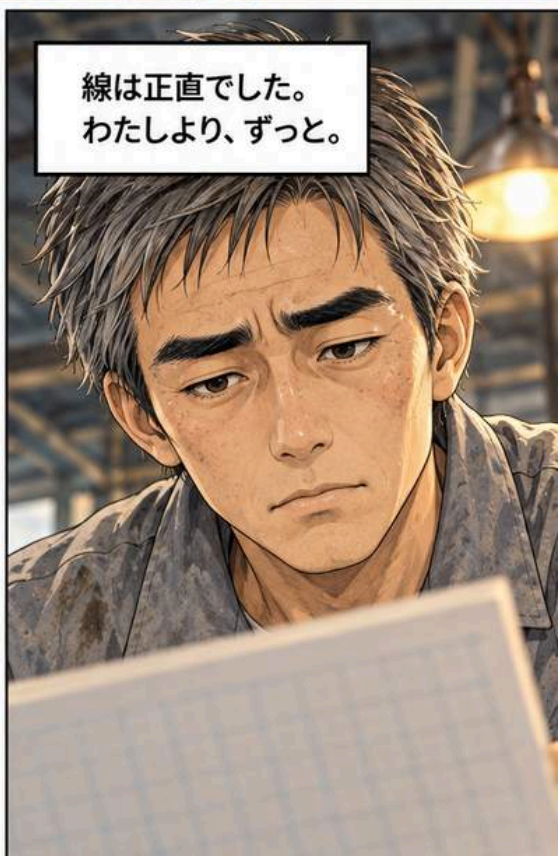
測った太さと、削った時刻を、
一本ずつ方眼紙に点で打って
いきました。横が時刻、
縦が太さです。



朝から夕方へ向かって、
少しずつ右上がりになる
線が出ました。



線は正直でした。
わたしより、ずっと。



始業前に三十分ほど、機械を空で回して温めておくことにしました。



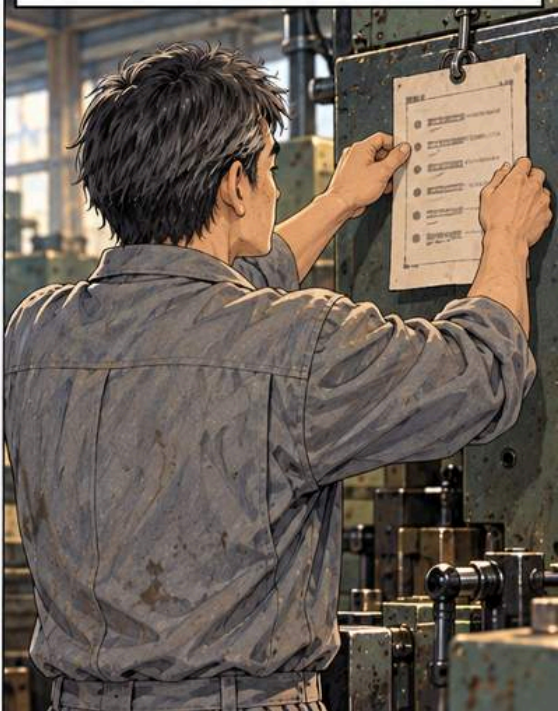
測るのを十本に一本に戻しました。



その途中に、人の手で確かめる
ところを入れ直したのです。



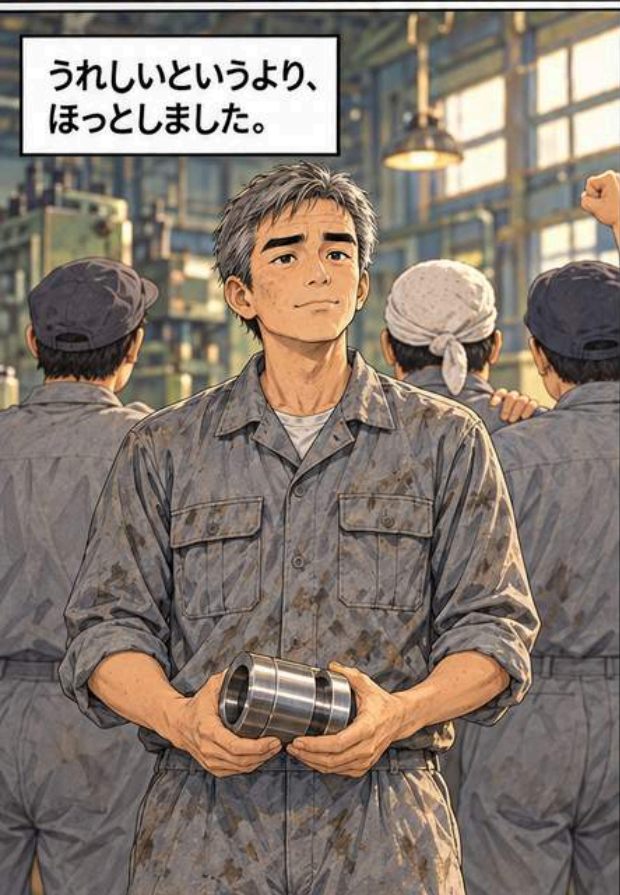
誰が機械の前に立っても、同じように
やれるようにするためです。



昭和61年、作り直した工程で、
量産が安定しました。
返品は、もう出なくなりました。



うれしいというより、
ほっとしました。

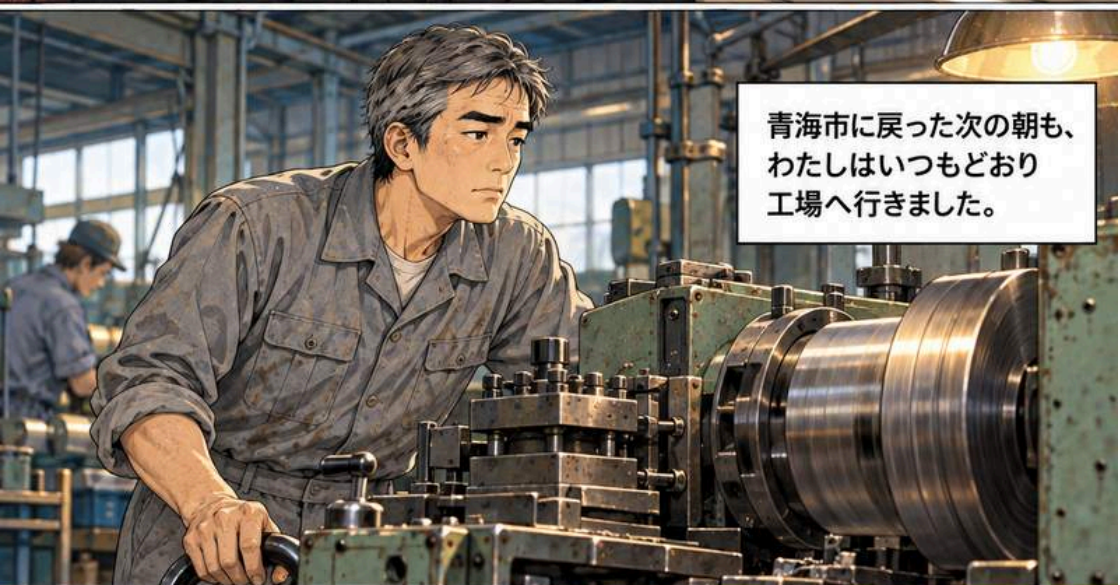


機械がどれだけ正直でも、
その正直さを確かめるのは、
人の手ということです。





昭和63年、
母のキヨが亡くなりました。
わたしは50でした。
正二には、母のことを
ずっと任せきりでした。



青海市に戻った次の朝も、
わたしはいつもどおり
工場へ行きました。



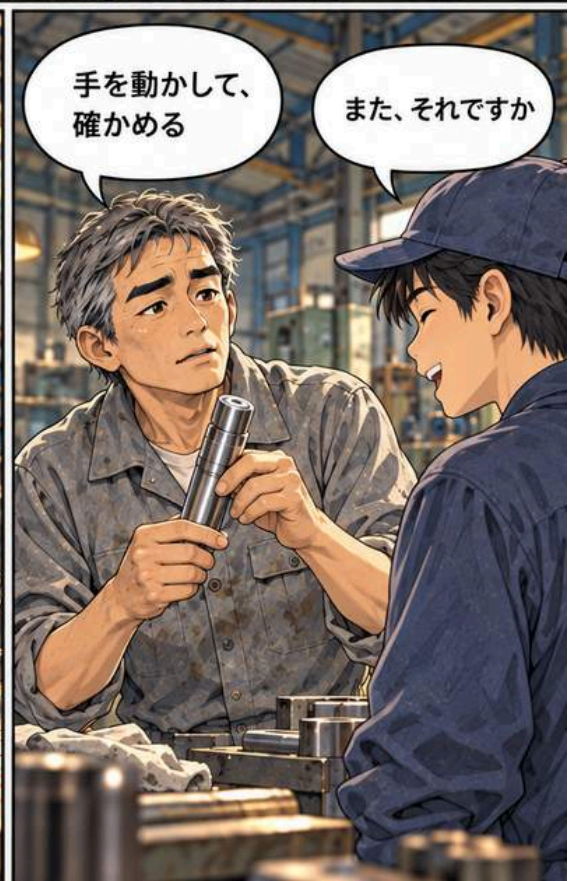
母の手は、田畑の仕事で、
指の節が太くなっていました。



新しく入った人には、
まず、手回しの旋盤で
一本削ってもらいます。



叱るより、一緒に測るほうが
伝わることもあると、
そのとき思いました。



手を動かして、
確かめる

また、それですか

平成2年、若い人に技能を教える取り組みで、社内表彰を受けました。わたしは52でした。



手を取って、と書いてありますね



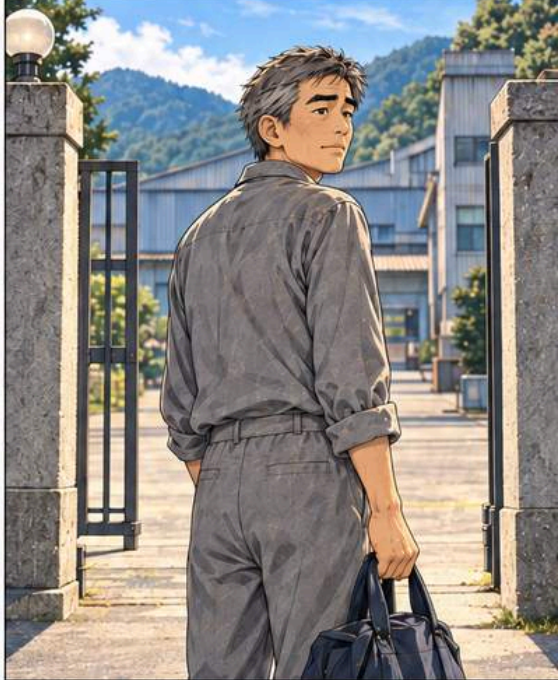
失敗した者が表彰されるのは、妙な気持ちでした。表彰状は、額には入れませんでした。



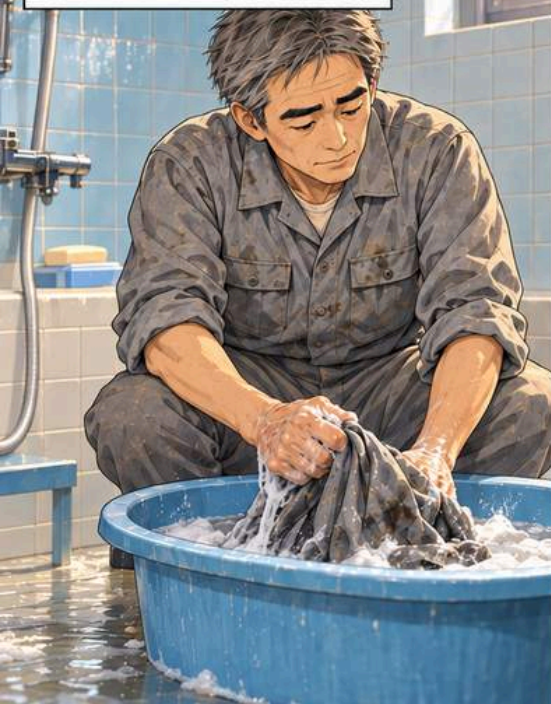
平成10年、60で、
東浜精機を定年で
退職しました。



十八で初めてくぐった門です。
一度だけ振り返りました。



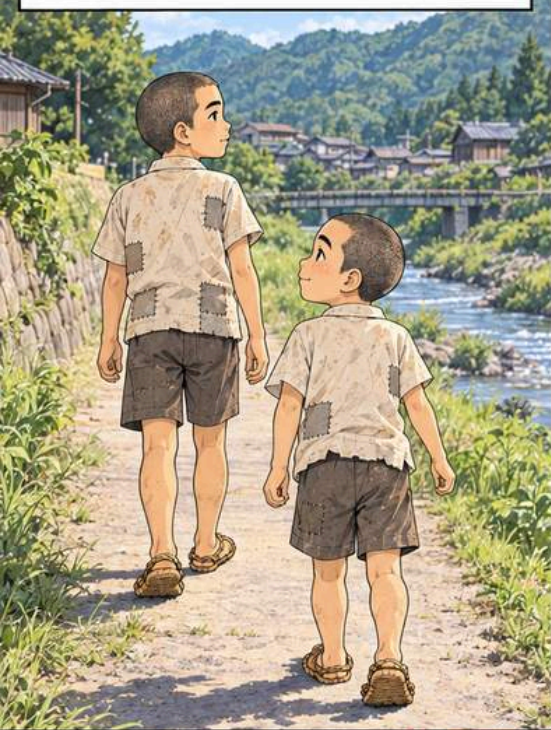
四十二年分の油は、
一回では落ちませんでした。



あとになって誠が、
あの日のことを覚えていると言いました。



正二は、わたしより四つ下の弟です。



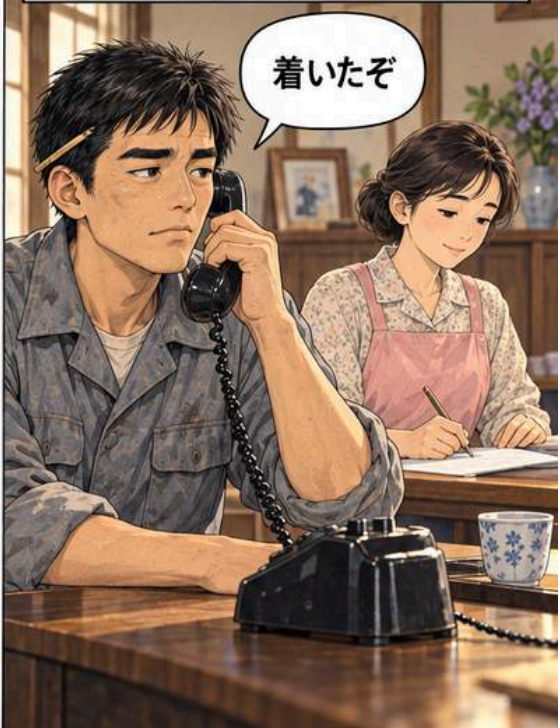
その日から、わたしは町を出た者になり、
正二は町に残った者になりました。



箱の中に手紙は入っていません。
柿だけです。



正二も「そうか」と言うだけでした。





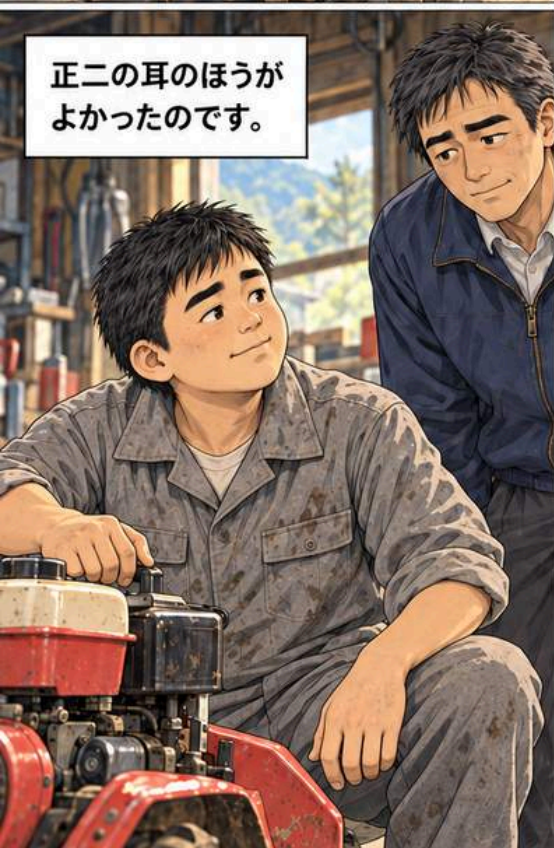
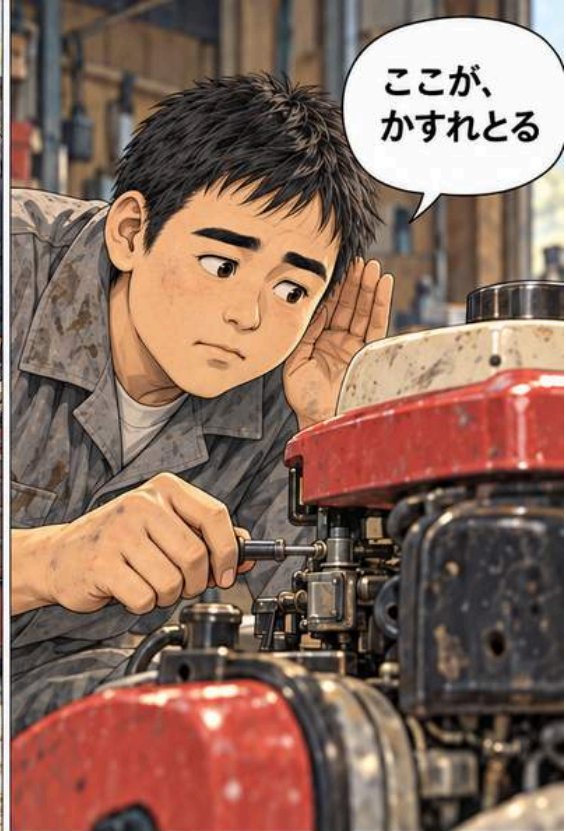
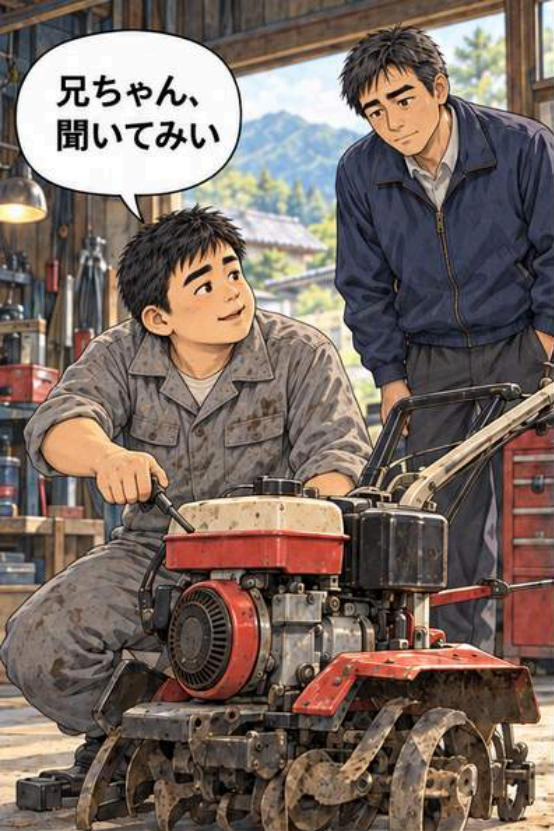
たたむことにした、と
正二から聞いたのは
電話でした。わたしは
「そうか」と言いました。



父が毎日火を入れていた
場所を、弟ひとりに
決めさせてしまった。



父の金床だけは、勤め先の
店の裏の物置に運んだと、
あとになって聞きました。



帰るたびに、
正二は駅まで車で
迎えに来てくれました。



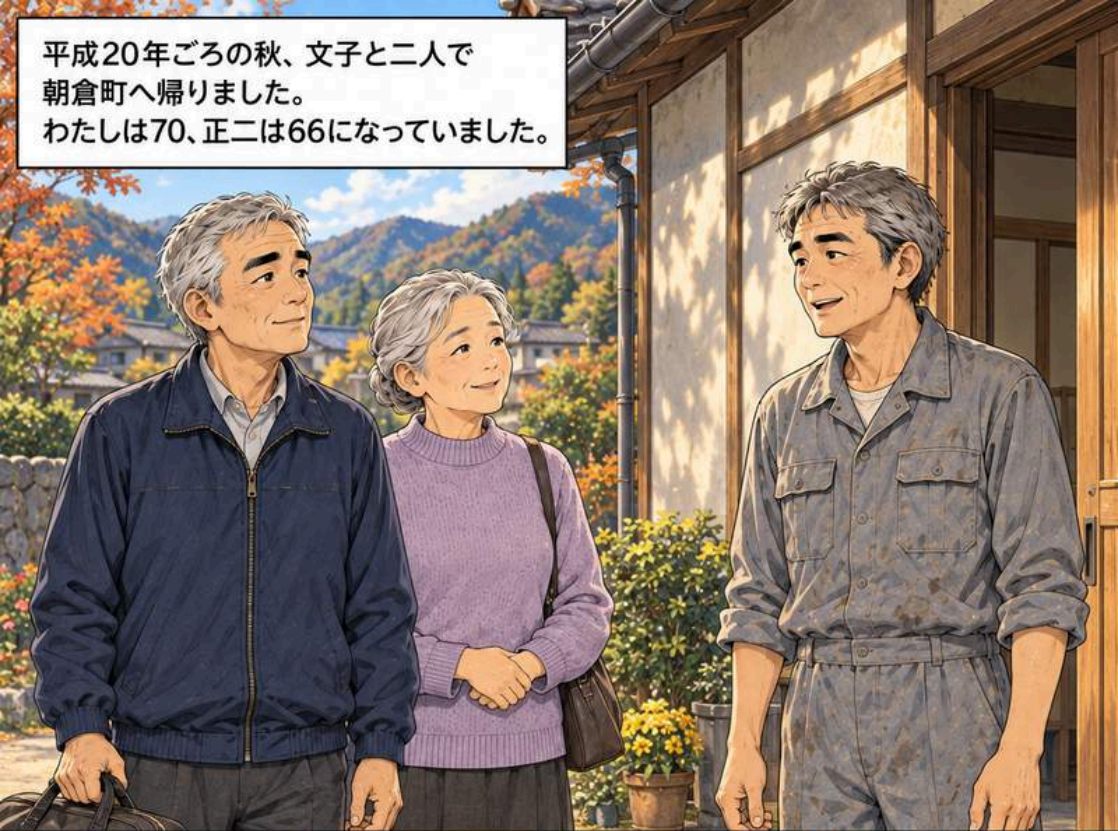
父の金床を置いた物置の前で、
決まって車を止めました。
中に入るわけではありません。



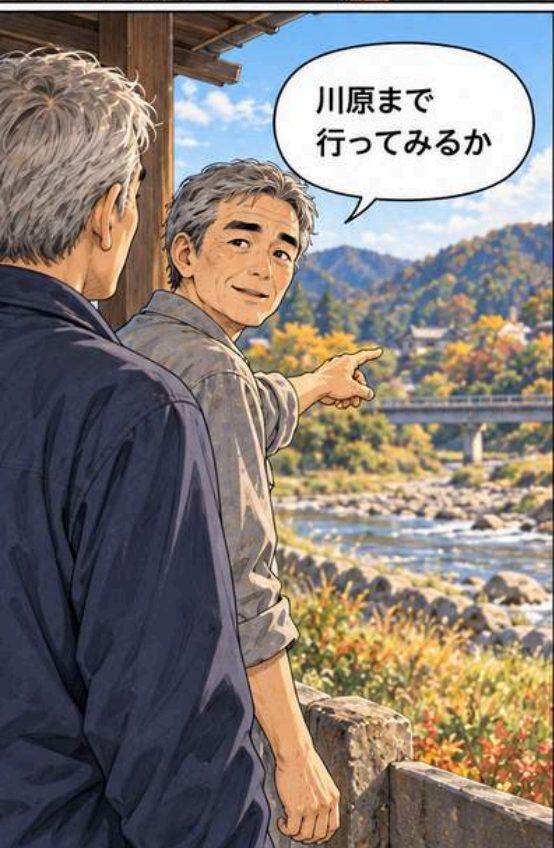
兄ちゃん、
いまの機械は中が見えん



平成20年ごろの秋、文子と二人で
朝倉町へ帰りました。
わたしは70、正二は66になっていました。



川原まで
行ってみるか



二人並ぶと、
ちょうどいい速さでした。

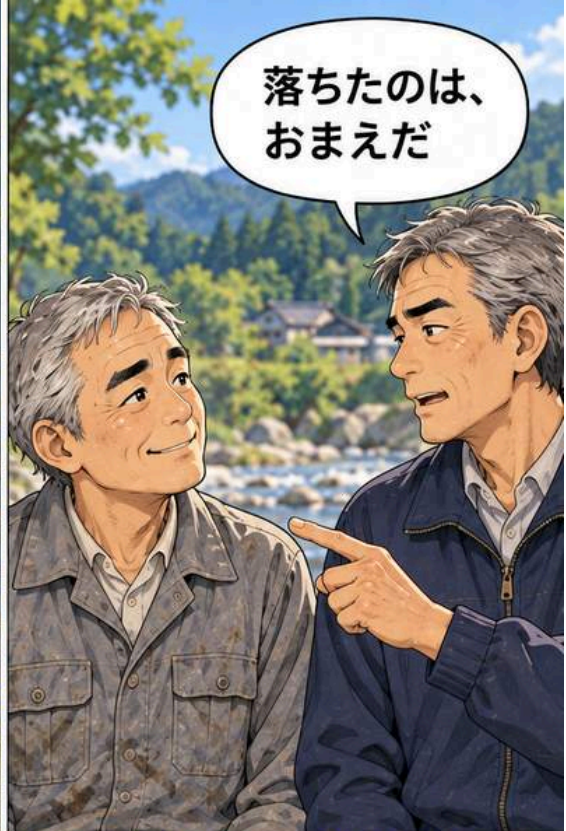






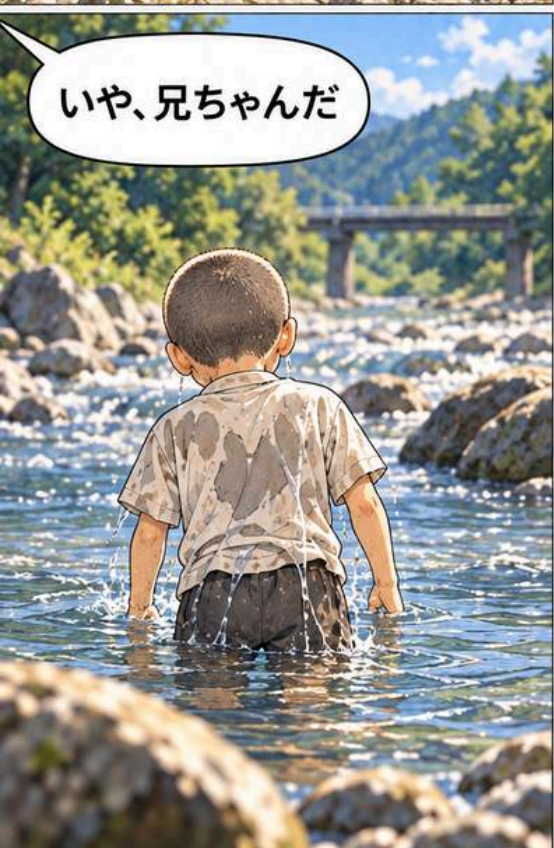
兄ちゃん、
ここで一回、
川に落ちたろう

A wide shot of two men standing on a rocky riverbank, looking across a river towards a bridge and forested hills. The man on the left is wearing a grey jacket and pants, and the man on the right is wearing a dark blue jacket and pants.



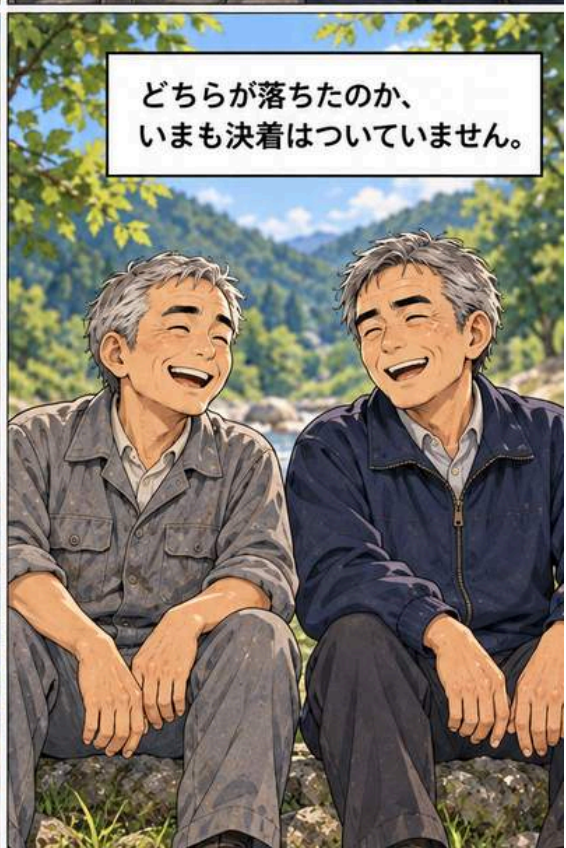
落ちたのは、
おまえだ

A close-up of the two men. The man in the grey jacket is smiling and looking up at the man in the dark blue jacket, who is pointing his finger at him.



いや、兄ちゃんだ

A shot of a young boy with short dark hair, wearing a light-colored t-shirt and dark pants, standing in the river. He is looking back over his shoulder towards the viewer. The water is splashing around his legs.



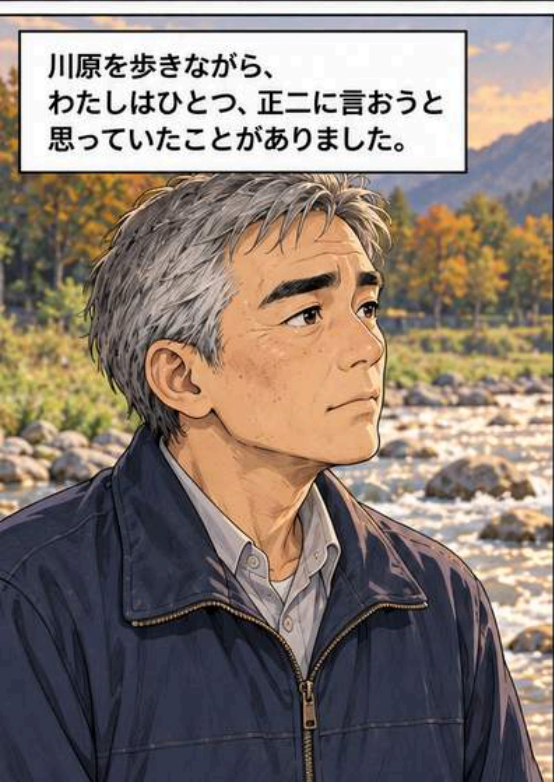
どちらが落ちたのか、
いまだ決着はついていません。

A close-up of the two men sitting on a rock by the river. They are both laughing heartily. The man in the grey jacket is on the left, and the man in the dark blue jacket is on the right.

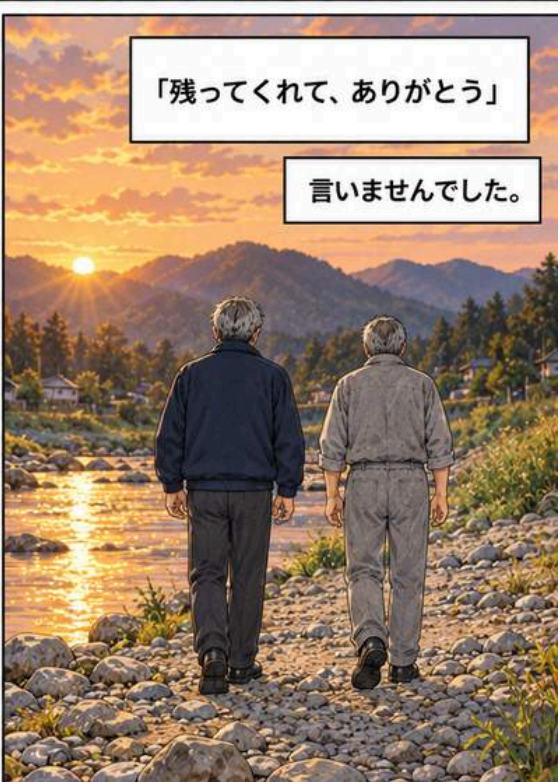


二人、並んで

それが、わたしと正二が
一緒に写った最後の写真に
なりました。



川原を歩きながら、
わたしはひとつ、正二に言おうと
思っていたことがありました。



「残ってくれて、ありがとう」

言いませんでした。



兄ちゃん、
こっちは
心配いらずで



わたしはまた、「そうか」と
言いました。平成21年の冬、
正二が亡くなりました。



鍛冶場の跡は、空き地になって
いました。裏の川の音だけは、
子どものころと同じように
聞こえていました。



その年の秋、柿は届きませんでした。



たまに立ちどまるのは、
二人のあいだのすきまを見るときです。



東浜精機を退職してから、
朝の食卓で二人でお茶を飲む
時間が加わりました。



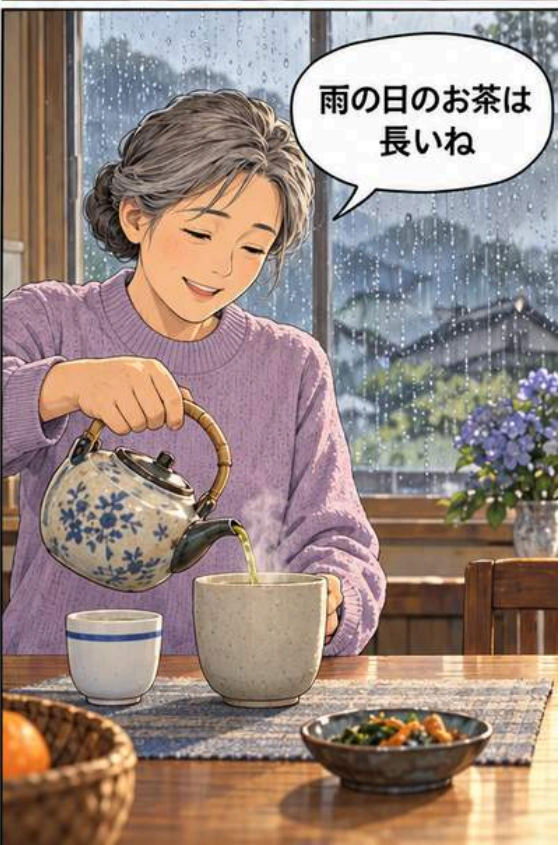
あなた、お茶って
こんなに熱かったかね



文子はいつも、先にわたしのに
注いで、それから自分のに
注ぎました。



雨の日のお茶は
長いね



お湯は、
ひと呼吸おいてから



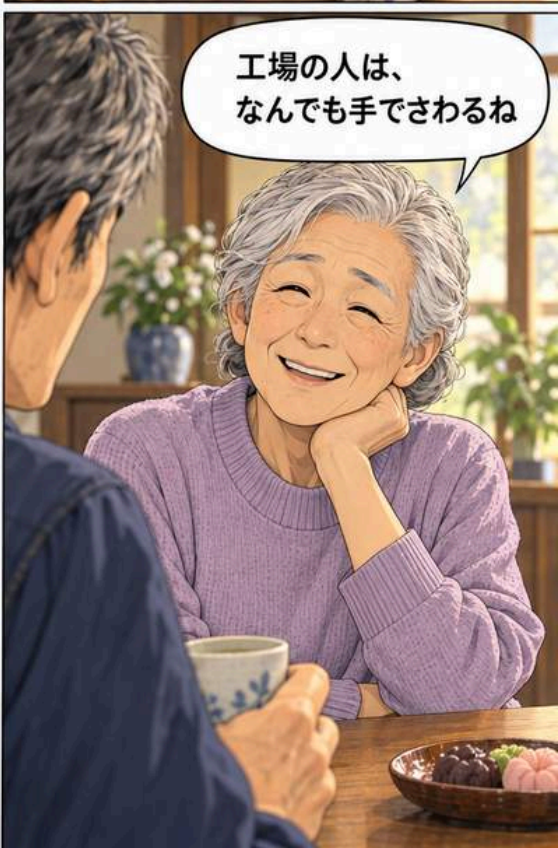
わたしは言われたとおりに
お湯を冷ました。



それから湯のみを手のひらで包んで、
熱さ確かめました。



工場の方は、
なんでも手でさわるね

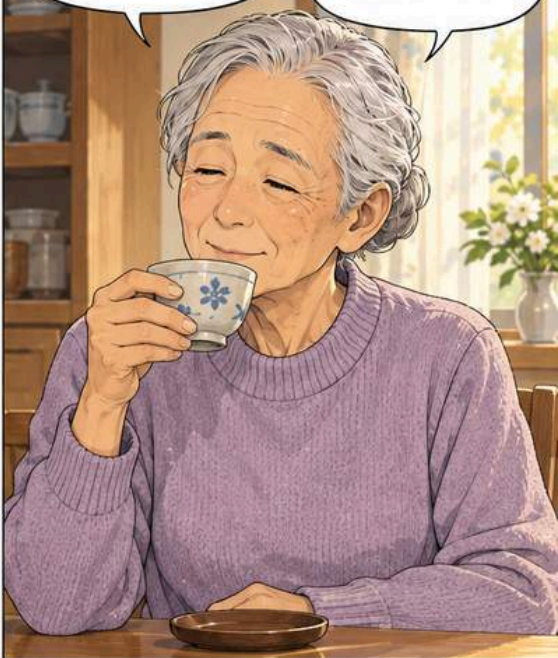


台所に立つ時間が短くなり、
朝のお茶は、わたしが淹れる
ようになりました。

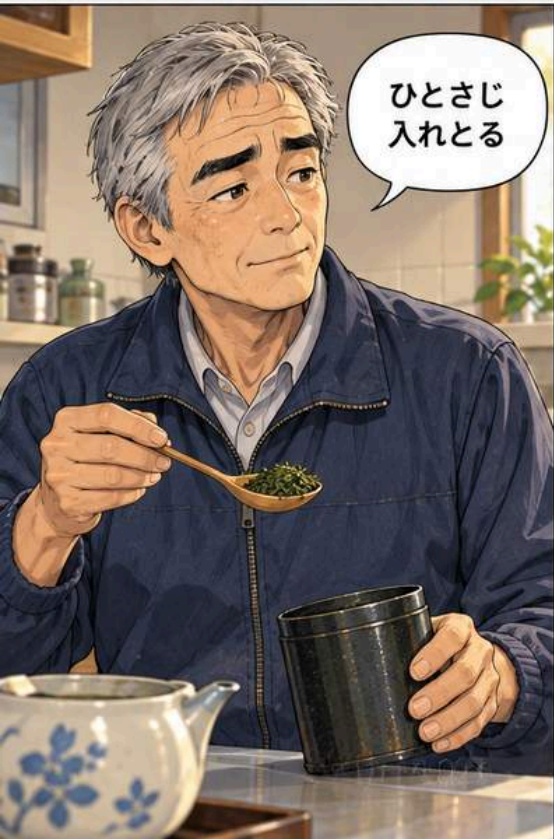


あなたのお茶は
濃いね

葉はひとさじで
いいの



ひとさじ
入れとる



それは山盛り
でしょう



文子は、濃いと言いながら、
残さずに飲みました。



平成27年の春、文子が
亡くなりました。結婚してから、
45年でした。



四十五年いっしょに暮らして、
わたしはこの台所のことを
何も知らなかったのだと思いました。



文子がいなくなっても、
食卓に湯のみを二つ出しました。
わかっていて、出しました。



捨てる前に湯のみに手をあてて、
冷めたかどうかを確かめました。



湯のみを食卓に置く音が、
こんなに大きかったかと思いました。





頭で決めるより先に、
手のほうが止まりました。



交子の湯のみは、
いまま台所の棚に置いてあります。



朝のお茶は、いまま淹れています。
お湯はひと呼吸おいてから。
葉の量は、文子に言わせれば、
たぶんまだ濃いのでしょう。



工場では四十年あまり、
削って、測って、また削っていました。
それがなくなると、手のやり場がないのです。

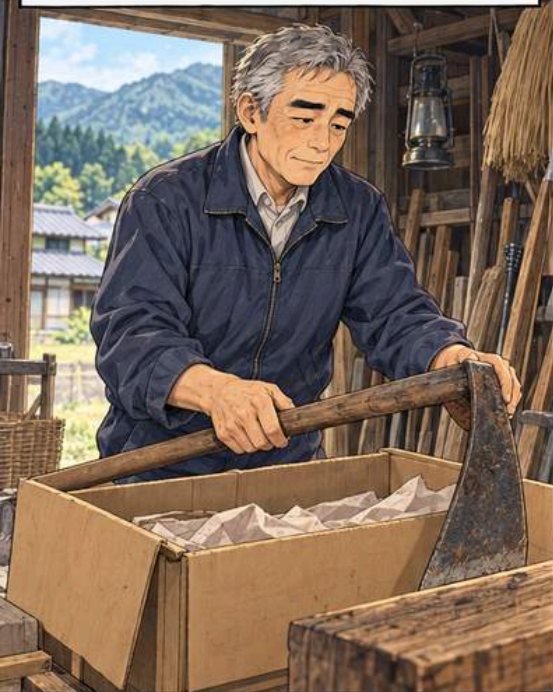


裏の畑、
何年も空いたままですよ



家の裏の畑を借りました。
わたしは61になっていました。

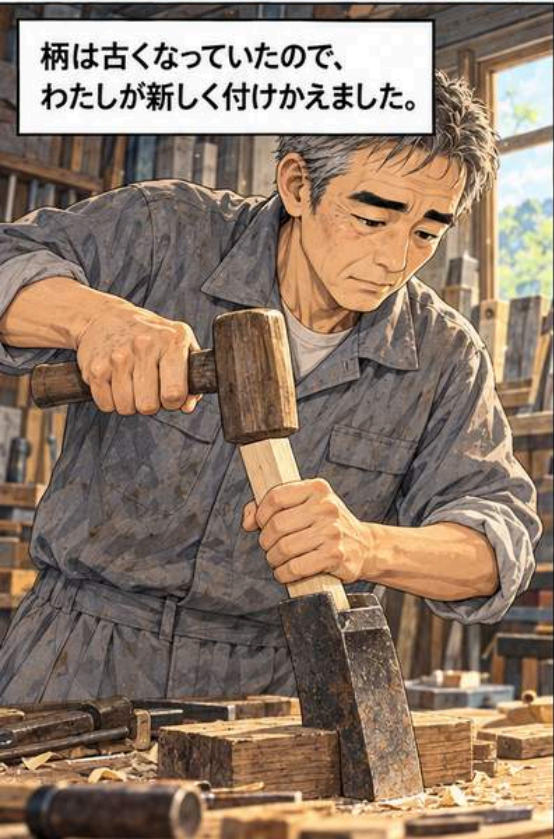
鍬は、正二に頼んで、実家の納屋に残っていた父の鍬を一本送ってもらいました。



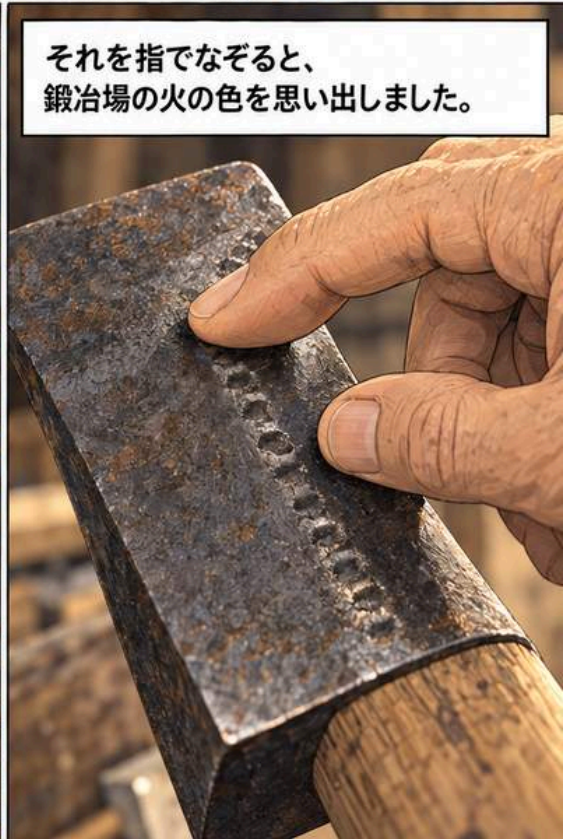
兄ちゃんが畑か



柄は古くなっていたので、
わたしが新しく付けかえました。



それを指でなぞると、
鍛冶場の火の色を思い出しました。



鍬を打ちこむと、
手首にずんと返ってきます。



その音がするたびに、
刃が欠けていないか確かめてしまいました。



石の山のほうが、
野菜より育っていますね



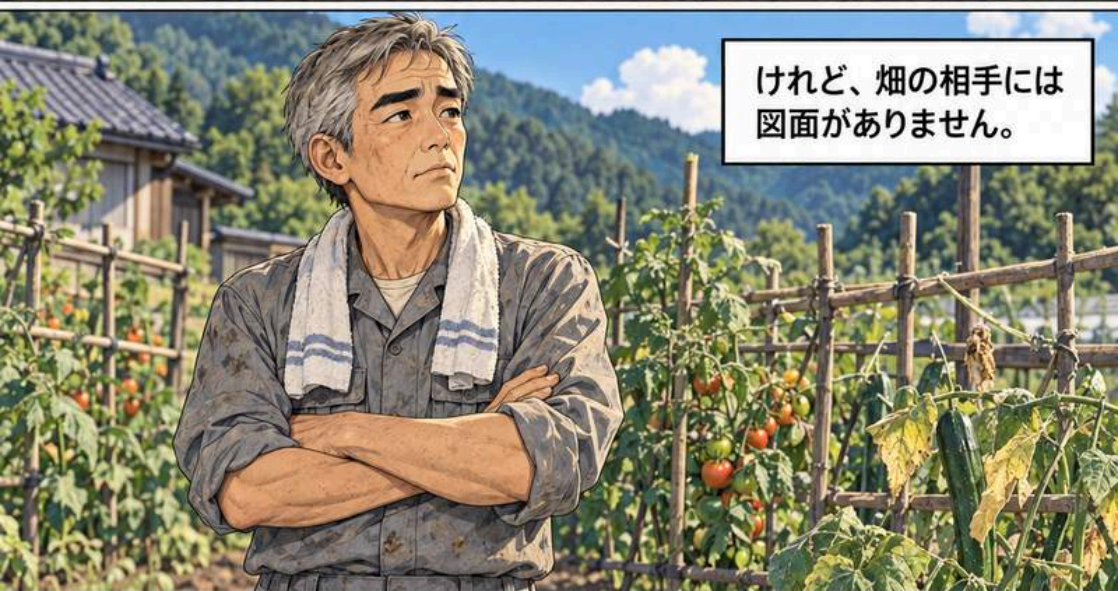
旋盤じゃないんですから



一年目の夏は、
うまくいかないことばかりでした。



けれど、畑の相手には
凶面がありません。



手を開いたときにかたまりのまま残って、
指で押すとほろっとくずれる。
それが、ちょうどよい湿り気だそうです。



握って、開いて、
確かめる。最後に頼りになるのは
自分の手です。



二年目の夏に掘ったじゃがいもは、
大きくそろっていました。



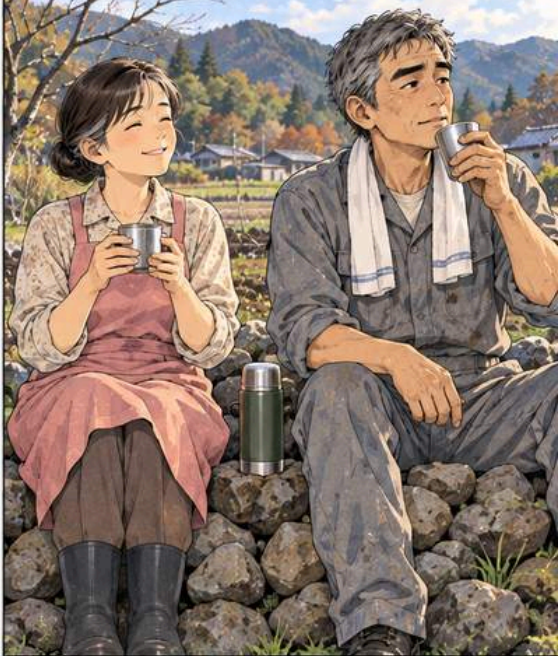
土を作るのに一年かけたのは
無駄ではなかったと思いました。



みんなが集まったときに、
鍋にできるでしょう



ひと仕事すむと、石の山に腰をおろして、
二人でお茶を飲みました。



霜に当たったほうが
甘くなるんですよ



長靴の下でさくさくと音がしました。
文子はその音が好きでした。



孫は五人います。孫たちは家に来ると、
たいいてい畑に出たがりました。



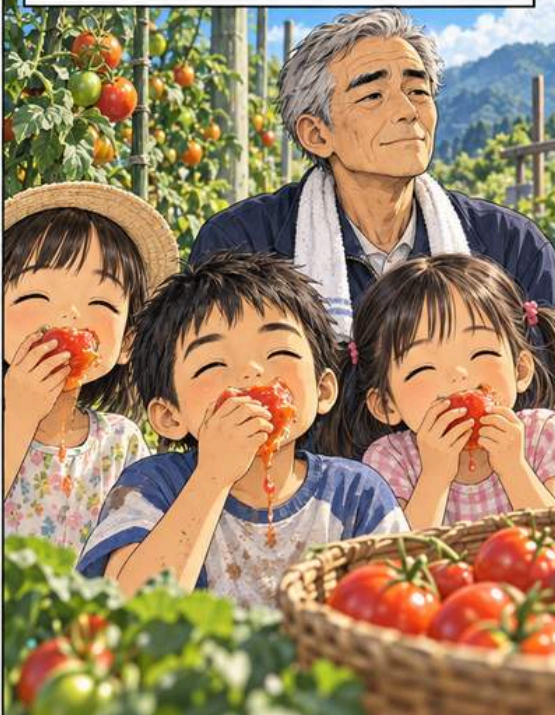
野菜より自分の靴のほうが
よくぬれていました。



柄の短い小さな鍬を一本買ってやりました。



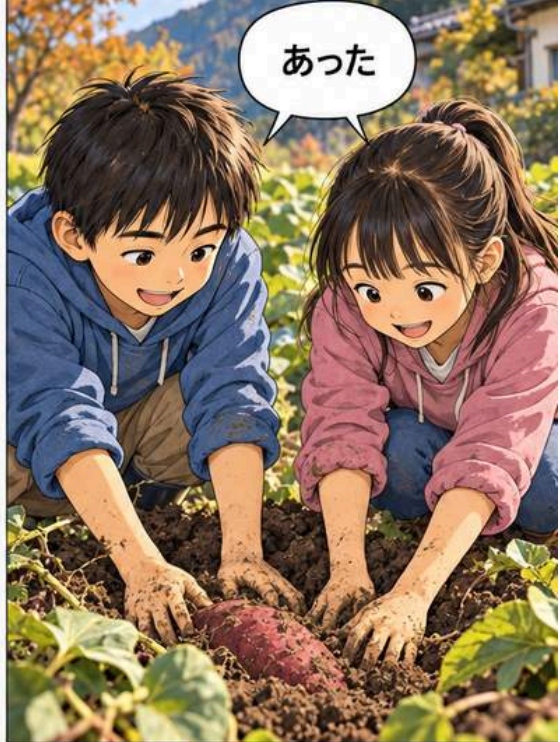
わたしは口では何も言いませんでしたが、
内心は得意でした。



スコップは芋を切る。
まわりを手で掘ってみろ



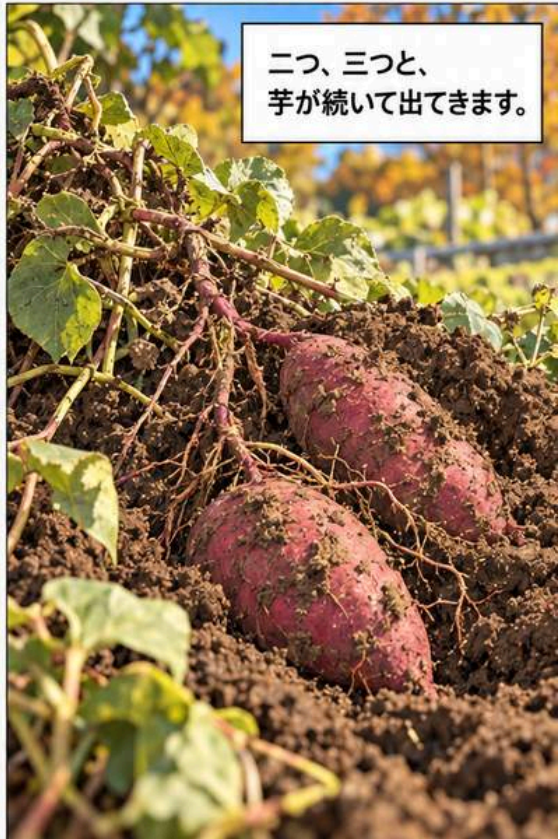
あった



つるをたどってみろ。
ほかにもついとる



二つ、三つと、
芋が続いて出てきます。



孫たちは、泥だらけの手で芋を持って、
文子のところへ見せに走っていきました。



自分の手で土をさぐって見つけたほうが、
ずっと覚えているものだったからです。



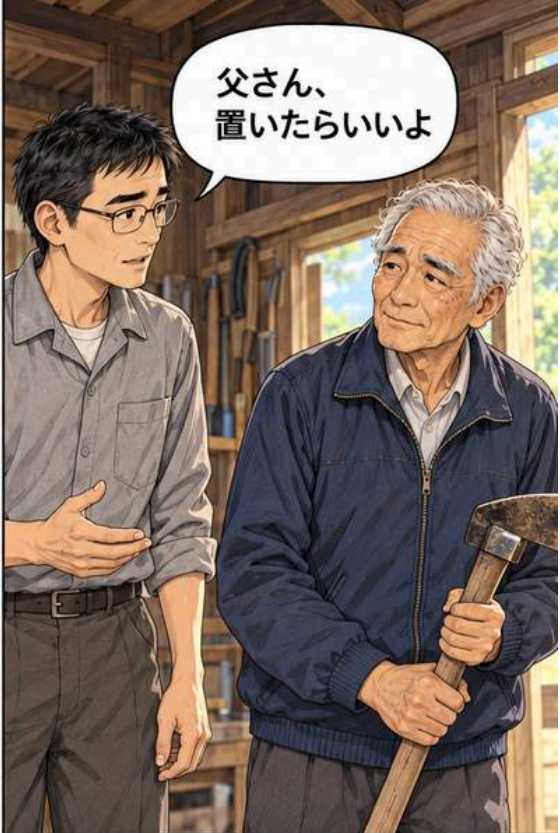
文子が亡くなってからは、
畑は一人で続けました。



きっかけは、父の鍬でした。
柄の付け根の金具がゆるんで、
がたつくようになったのです。



父さん、
置いたらいいよ



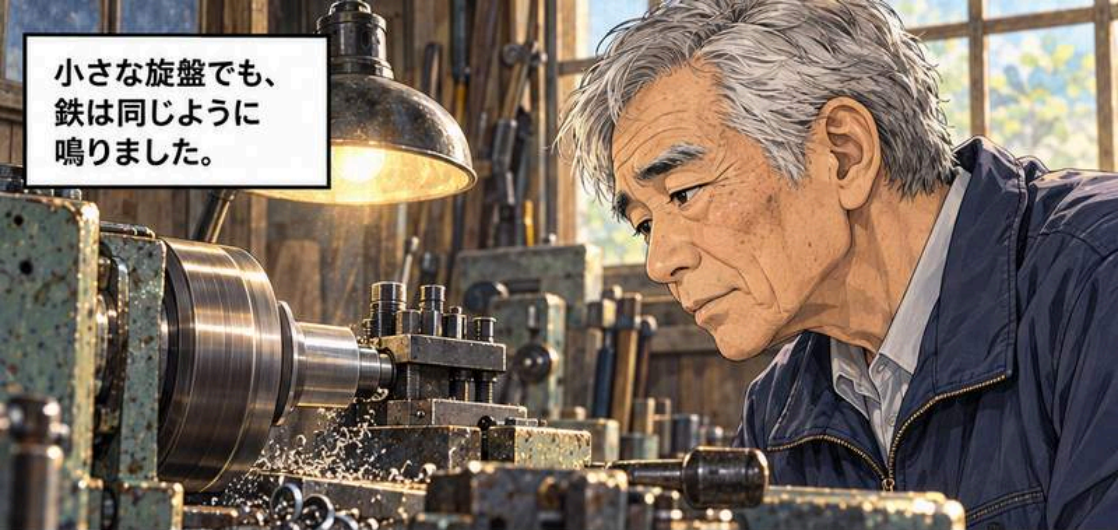
令和2年ごろ、作業小屋に、
小さな卓上旋盤を一台置きました。
82のときです。



きゅるきゅると鉄の削れる音がしました。



小さな旋盤でも、
鉄は同じように
鳴りました。



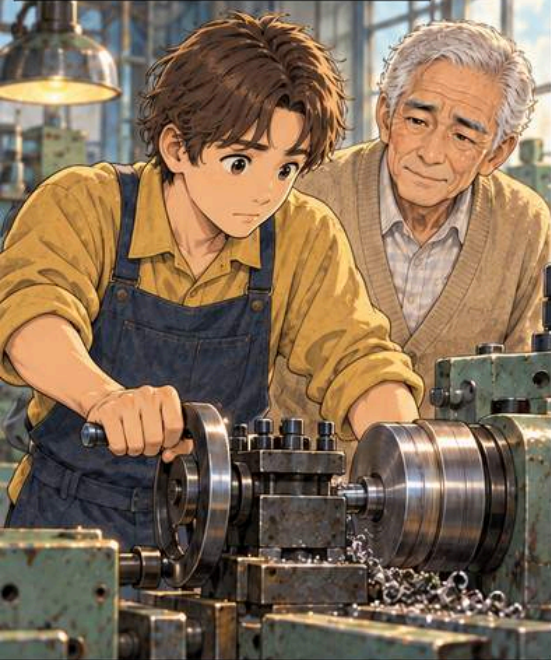
金具は、三度目で
ようやく、柄にきちんと
おさまりました。



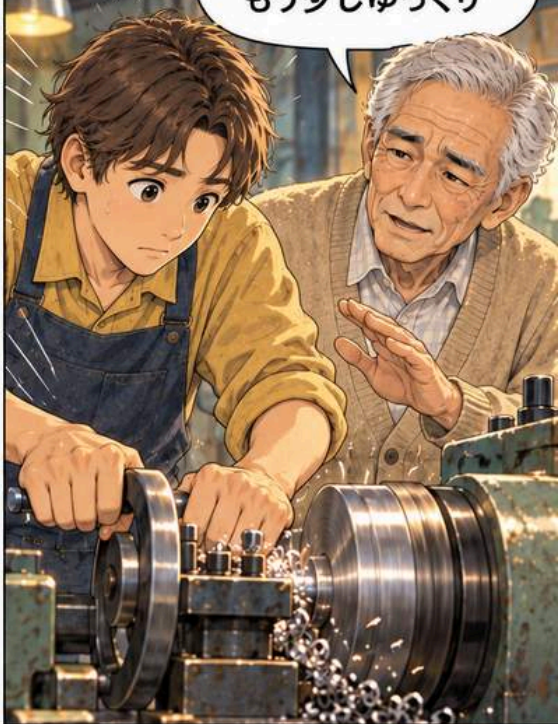
父は、鉄を打って鋤を作りました。
わたしは、鉄を削ってその鋤を
直しています。



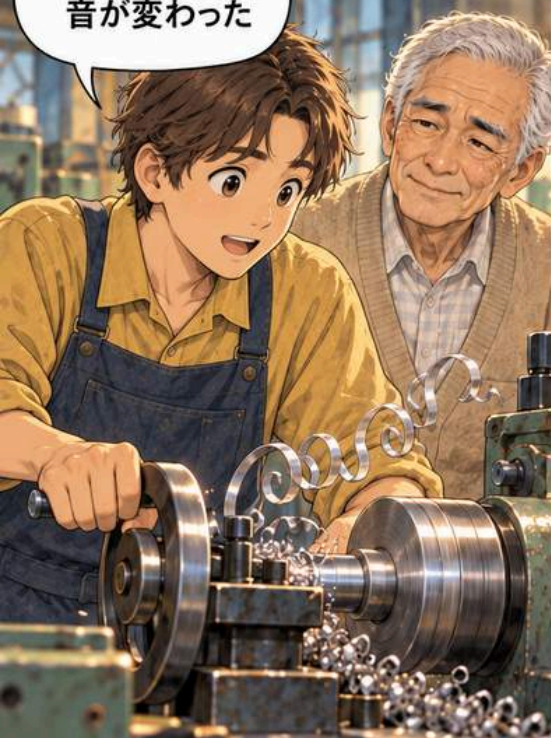
刃物の当て方と、
ハンドルを回す速さだけを
教えました。



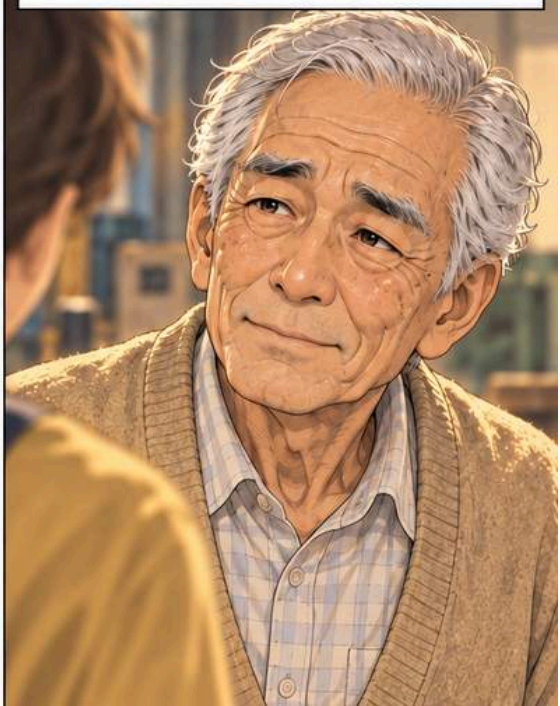
いまの音はだめだ。
もう少しゆっくり



ほんとうだ、
音が変わった



わたしが何十年もかけて覚えたことを、
孫は十分ほどで一つ覚えました。





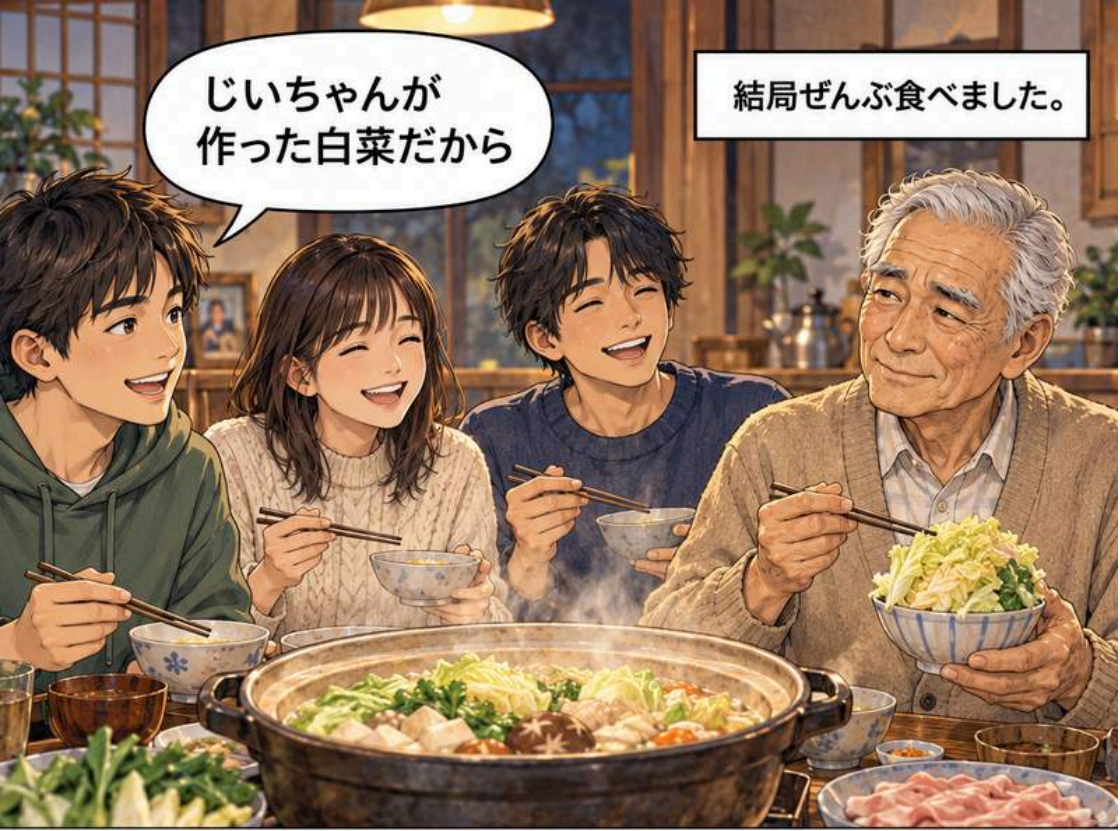
令和7年の冬、孫たちが集まって、畑の野菜で鍋をしました。文子を選んでいた、冬の鍋の野菜です。



じいちゃんはずっと座っていて



わたしは、ほとんど口をはさまずに、それを聞いていました。



じいちゃんが
作った白菜だから

結局ぜんぶ食べました。



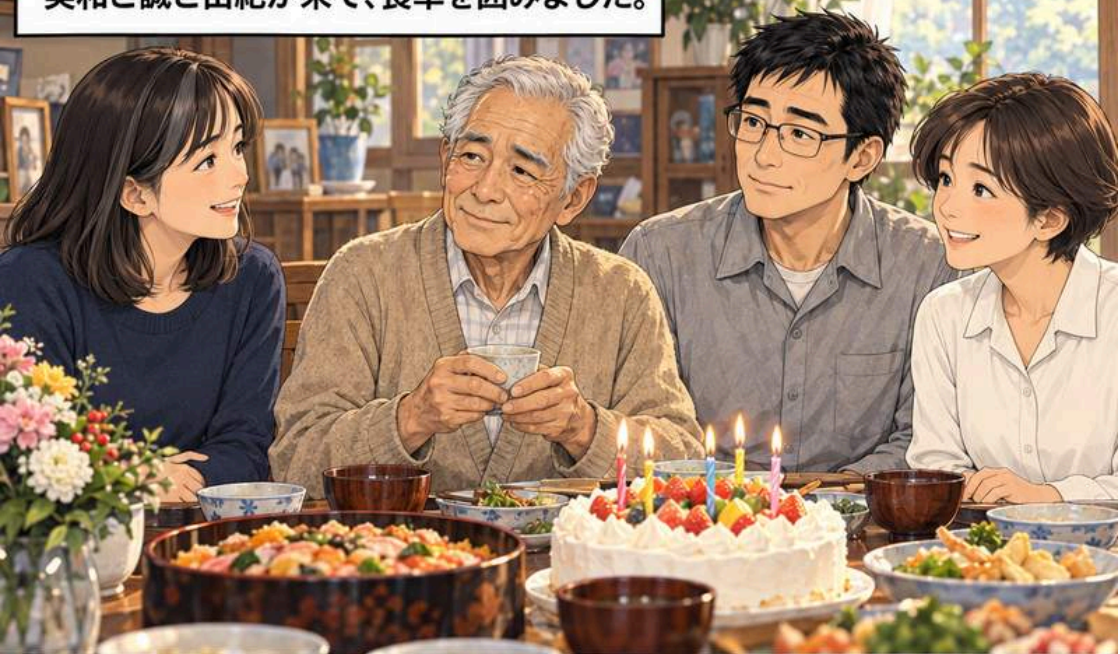
じいちゃん、また畑の
野菜で鍋をしよう



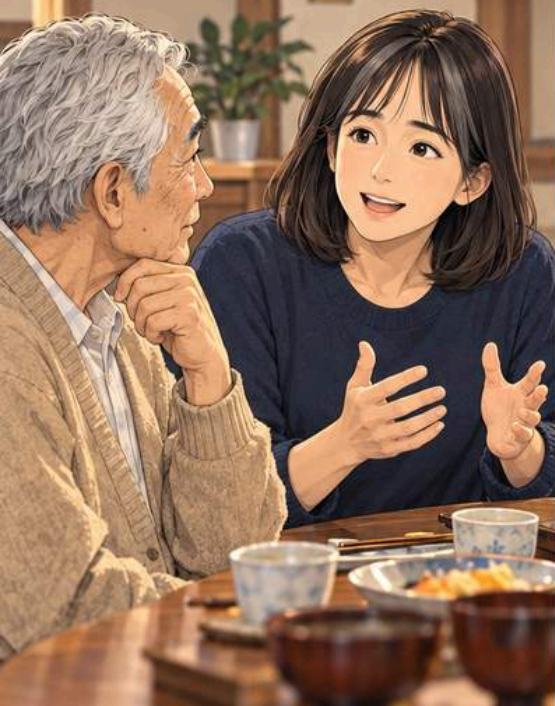
おう

文子が、なぜ冬の鍋の野菜ばかり
植えたがったのか、ようやくわかった
気がしました。

令和8年の一月、
わたしは米寿の誕生日をむかえました。
美和と誠と由紀が来て、食卓を囲みました。



わたしの話を本にしようと
持ちかけられたのも、その食卓でした。



そのあとで、三人がそれぞれ、
わたしに言葉をくれました。





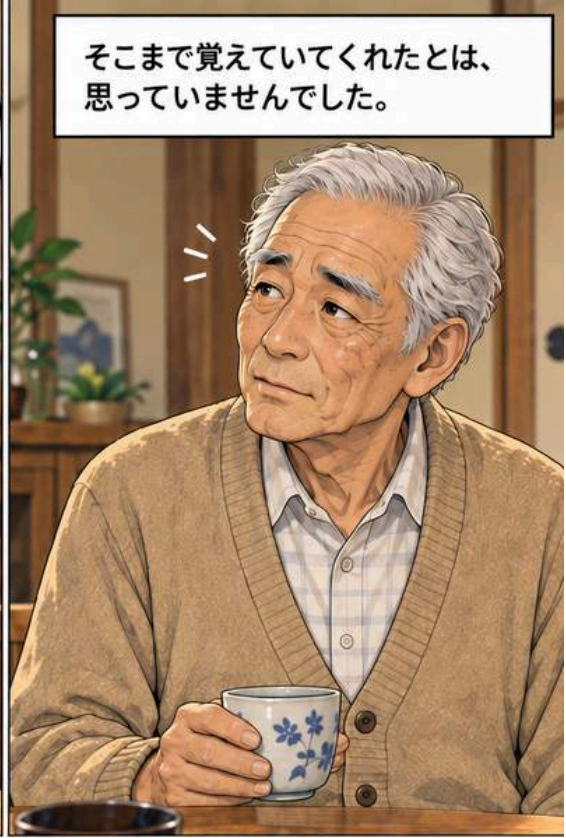
お父さん、食卓でいつも
黙って、わたしたちの話を
最後まで聞いてくれて
ありがとう



それを、そんなふうに
受け取ってくれていたとは、
知りませんでした。



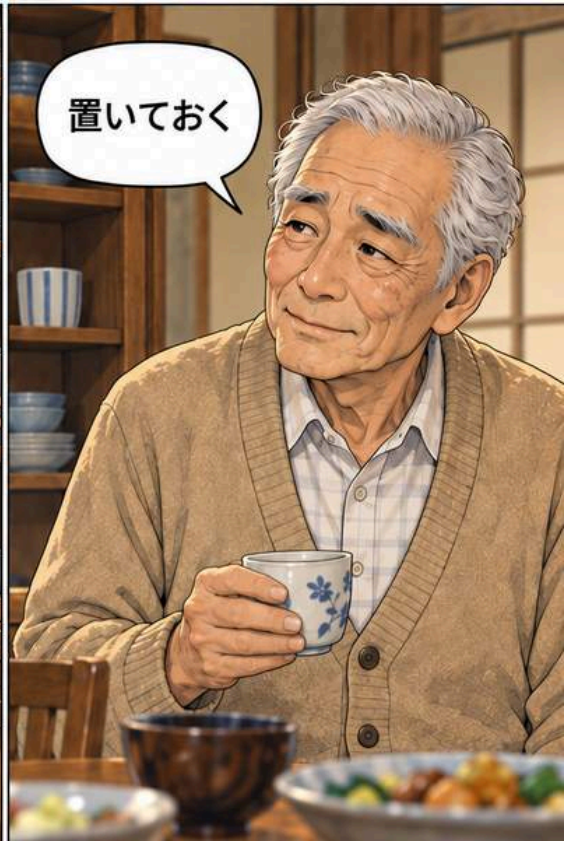
自転車の日の
『音を聞け』は、
いまでも仕事で
使っています



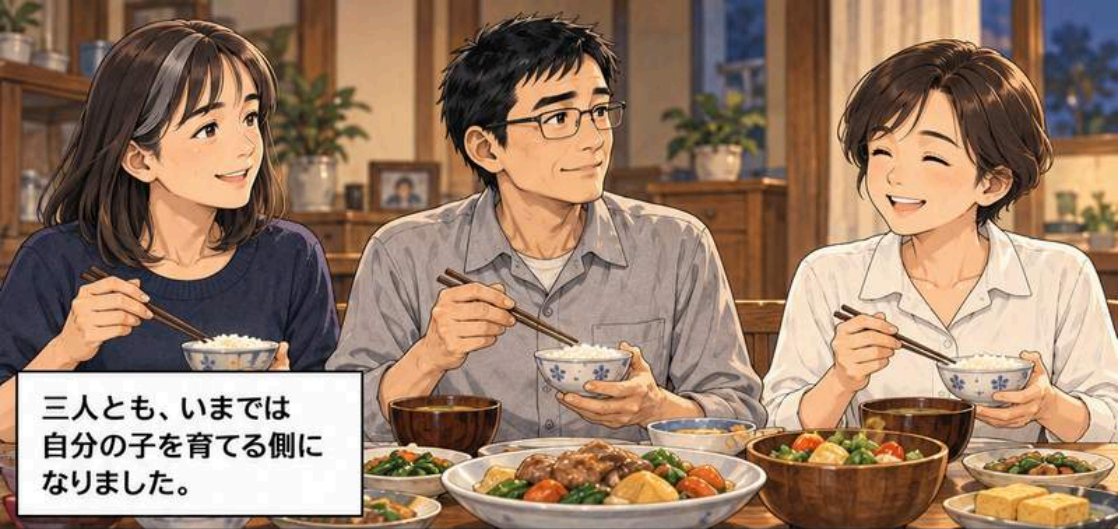
そこまで覚えていてくれたとは、
思っていませんでした。



お母さんの湯のみ、
ずっと台所に
置いておいてね



置いておく



三人とも、いまでは
自分の子を育てる側に
なりました。



親が子に何を残したかは、
親にはわからないものだ
と 思いました。



ただ、自分の湯のみを
手に持ったまま、
しばらく黙っていました。

手を動かして、確かめる。



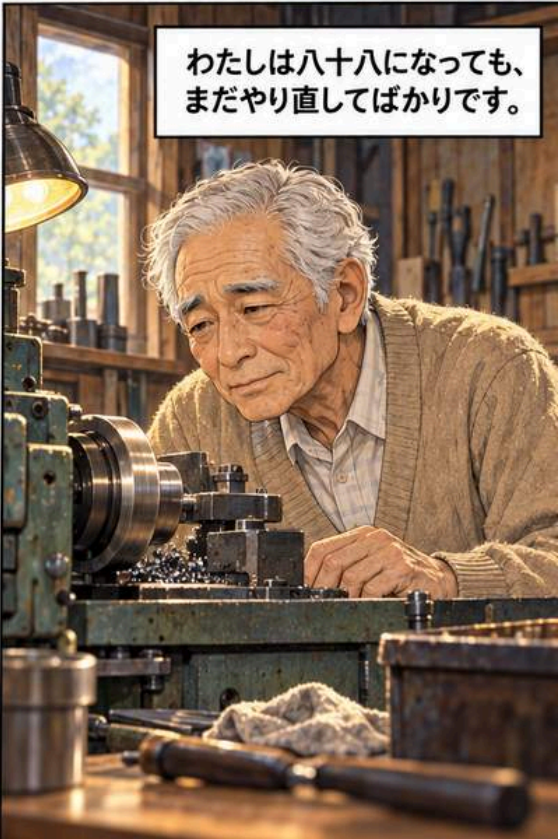
父の鍛冶場でふいごを押していたころから、わたしはそうやって覚えてきました。旋盤も、畑も、同じでした。



迷ったら手を動かしてください。

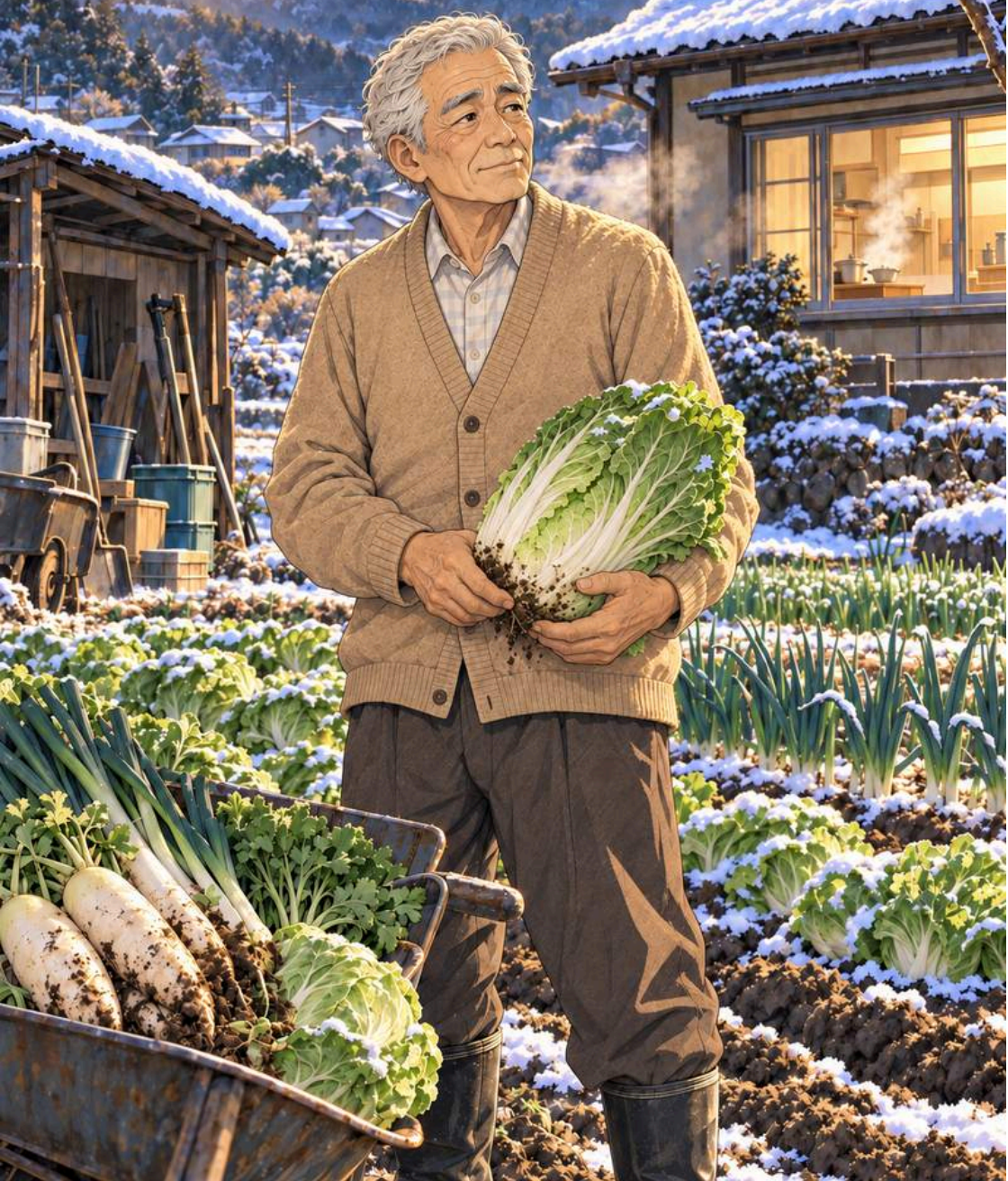


わたしは八十八になっても、まだやり直してばかりです。



わたしの一生は、鉄の音といっしょにありました。
そして、その音のあとには、いつも食卓がありました。

冬になったら、また畑の白菜とねぎと
大根と春菊で、鍋をしようと思います。
その日まで、わたしは畑に出て、
手を動かして、確かめます。



奥付

題名: 鉄の音と、家族の食卓

語り: 高橋正一

贈り主: 美和・誠・由紀と家族一同

版: 見本 第1稿（2026年10月3日）

制作: YNファクトリー / YN出版

この本は、自分史サービスの見本として作った架空サンプルです。登場する人物、地名、会社、出来事はすべて架空で、実在の人物・団体・場所とは関係ありません。